地域学研究会第８回大会　報告

地域課題と知のクロス

「地域で生きる場をつくる」

基調講演：森まゆみ　分科会 A：寺岡昌一、古田琢也　分科会 B：鈴木直子、谷口美也子

The Eighth Annual Meeting of
the Tottori University Association for Regional Sciences:
Creating one's life world in a community

MORI Mayumi*, TERAOA Masakazu**, FURUTA Takuya***,
SUZUKI Naoko****, TANIGUCHI Miyako*****

キーワード：地域学，地域雑誌，二拠点居住，ワークライフバランス
Key Words: Regional Sciences, Local magazine, Multi-habitation, Work-life balance

Ⅰ．開会

開会挨拶

藤井　正（地域学研究会会長・地域学部長）

おはようございます。地域学部長の藤井と申します。本日は、地域学研究会大会に朝一番からお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

鳥取大学の地域学部は2004年にスタートいたしました。もう13年がたちます。最近は、地方創生と大学改革の中であっちこっちの大学にも地域系の学部ができるようになっておりますけれども、そのころはまだ珍しく、地域というそんな学部ができるのですか、あるのですかという、そういう感想もよくお聞きをしました。

その地域学部の活動をさらに教育、研究を発展するため、そして地域の皆さんに知っていただき、さらに地域との連携の可能性を広げていくために、この大会というのを開催してまいりました。もう第8回になりますけれども、開催を重ねてまいりました。

本日は、基調講演として森まゆみさんにおいでいただきました。地域雑誌の「谷根千」の活動をずっとされてきた方です。地域学部の必修授業でも、公開授業で大きな授業があるのですが、そこでも興味深い話をいただいたことがございます。東京はオリンピックに向けてさらに世界都市化を加速しているわけですけれども、その東京におきましても地域の課題というのは当然ございます。別に東京は宇宙空間に浮かんでいる町ではございませんので、地域の課題、地域という論点というものは決して地方だけの問題ではなくて、大都市にも共通するものでございます。今日はそういう意味でも、また新たな刺激を受けさせていただけるのではないかと、大変楽しみにしております。

また、お昼からは2階の会場に移りまして、地域学部の活動を示すポスターの展示もいたしております。お昼休み、空いた時間にでもご覧いただければと思います。

---

* 作家・編集者
** てらおか農園代表
*** 株式会社トリクミ代表取締役
**** 鳥取県中小企業労働相談所みなくる管理運営サブマネージャー労働・雇用相談員
***** 鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センター副センター長

午後のセッションは、2階の会場で学生の企画、今年の新たな試みですけれども、学生企画というものを軸にして行ってまいります。

どうぞ最後までおつき合いをいただければ幸いかと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

理事挨拶

法橋 誠（鳥取大学地域連携担当理事）

皆さん、おはようございます。今日は地域学研究会大会ということで、毎年この時期にさせていただいております。私も大学に来てから5年間がたちますけれども、これも8回のうち5回はこの会に出させていただいておるということで、毎年この時期楽しみにしておるところでございます。

今日は東京から森先生に遠くからお越しいただきました。どうも先ほどお話を聞きますと、昨晩の最終便が欠航したようで、朝早く東京を出発して来られたということで、ちょっと眠いのではないかと思いますけれども、よろしくお願いしたいと思います。

それから、県からは高橋部長に来ていただいております。鳥取大学と県、地域というのは、非常に昔からいろんな形でつながって連携をしてきたという、そういった伝統を持っております。今、国立大学というのは、経済界の意向を背景に、国のほうからいろいろ改革せよ改革せよということで非常に厳しく言われております。ある意味では兵糧攻めに遭って、どんどん改革しないとお金を出さないぞみたいな形で責められているということで非常に厳しい状況にあります。その中で、全国的には大学をある意味では3つのカテゴリーに分けていくということで、一つには旧帝国大学を初めとする、世界の中でランキングに入ることを目指す、変な話ですが、ランキングに入ることを目指すような大学、それから単科大学のようにある分野で非常に特徴的な活動をする大学、それと数多くの地方の大学という、こういう3つのカテゴリーに分けて、それぞれその特性にあった大学づくりをしなさいということで、それをやればいわゆる交付金を多少おまけしますよみたいな話になっています。それで、全国では、先ほど藤井学部長もおっしゃったように、今、地方大学の中ではそういった地域の学部をどんどんつくろうというムーブメントというものがたくさん出てきております。これもいかがなものかなという感じはしまして、国のほうから言われたから、では地域を考えましょうか、そういう学部をつくりましょうかみたいなところがあるのです。鳥取大学につきましてはそういうことではなくて、もう13年前から地域に根差した、そういった学問をきちっとつくっていきましょうという、非常に真面目な動機でもって地域学部ということをつくってきております。まだ、私から言うと、過程にあるのかなというふうに思っておりまして、これからどんどん地域とともに、いろんなことで地域のことを学んでいって、地域学というものを体系づけていかなくてはいけないのかなと考えておるところです。そういった意味では、地域学部の先生方とも私も、これからどうしていくかということをいろいろ議論しております。

今日は土曜日、お休みにもかかわらず、学生さんもたくさん来ていただきました。ポケモンGOを探しに砂丘にも行かずに、地域のことを一生懸命学びましょうということでここに集まって来ていただいています。非常に真面目な学生さんが多いなということで安心しております。

鳥取大学はずっと地域とかかわってやってきておりますけれども、今年10月には「地域価値創造研究機構」という新しい機構をつくりました。その中で、いろいろ地域の方々と一緒になって、地域の方々が自分で課題を探し、自分でその研究に参加して大学の研究者と一緒に研究する、その中には当然学生さんにも入っていただきたいと、そういう機構でございます。そういったことで、これから地域学部と一緒になって、ますます地域学、あるいは地域の課題研究というものを一生懸命やっていこうという姿勢が、こういったところからもあらわれているのかなと思っております。まさにここにあります「地域で生きる場をつくる」ということです。また、地（知）の拠点大学による地方創生事業ということもやっております。若い皆さんに、ぜひ鳥取の地域づくりに卒業後も継続的に参加していただきたいということを考えておるわけでございます。まさに「地域で生きる場をつくる」ということを、みずから学生さん方にも実践していただきたいなと思っておるところで、そういった意味では非常に時宜を得た企画かなと思っております。お聞きしますと、この企画、従来は先生方が中心になって大会づくりをやってこられたのですけれども、今年からは学生さん自らでこの大会づくりというものをやっていただこうということで取り組まれたようでございます。こういった大会の企画に当たられた学生さん、非常に慣れない仕事で大変だったかもしれませんけれども、そういったことを一人一人が主体的に実践していくことで、「地域で生きる場をつくる」ということにつながっていくのだろうというふうに思っているところでご

ざいます。

今日一日、この大会の中でいろいろなディスカッションが展開されると思います。一日が本当に地域を考える一つのいい機会になればと思っております。皆さん、最後まで参加いただきますようお願いいたしまして、私の挨拶にさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

来賓挨拶

高橋紀子氏（鳥取県地域振興部長）

皆さん、こんにちは。鳥取県の地域振興部長高橋と申します。本日は、地域学研究会第 8 回大会の開催、誠におめでとうございます。

地方創生ということで、数年前から政府が言われ始めましたけれども、鳥取大学におきましては、先ほどお話があったように、2004 年から地域学部というものを設け、先生方と学生の皆さんが地域に出かけ、中山間地の対策であるとか、中心市街地のこと、あるいは文化芸術を通じた人づくり、まちづくり、地域を支える人づくり、人材育成、そういったものにいろいろかかわっていただいたところで、本当に感謝申し上げます。

鳥取県は人口最少県でございますが、地方創生のリーダーとなるべく、地方創生と言われる前からいろいろ移住施策であるとか、子育て王国鳥取県ということで子育て施策とか、いろいろ先んじてやってきたところでございます。折しも「スタバはないけど日本一のスナバはある」ということで、変に全国から注目されたところでございますが、逆にそういった、お金はなくても知恵はあるということで、昨日からポケモン GO 大作戦が行われ、昨日も 1 万 5,000 人の方が砂丘に集まられたということですが、目標 4 万人以上、経済効果 4 億円を見込んでいます。これの発端は都会で歩きスマホが問題になったときに、鳥取県では砂丘をスマホ解放区にしようということを言ったら、ゲームの運営会社が、鳥取県のためだったら協力しようということでこういうイベントになったということでございまして、地方だからこそ、地方にあるそういった魅力をしっかりと見つけ、磨き上げて発信するという取り組みをさせていただいているところでございます。鳥取県、人口が少ないかわりに皆さんが一体となって何かしよう、一緒にやろうということで、いろんな地域でいろんな機運が生まれております。そして鳥取大学様のほうにいろいろサポートもいただいているところでございます。

移住者の方も年々ふえて、今、年間 2,000 人の方が移住をして来られます。特に子育て世代の方が多くて、森のようちえんのように自然が豊かな鳥取県で子供を育てたいという方も多くおられます。ただ、そのときに、ではどうやって生活していくのということもあろうかと思います。そういう意味で本日の「地域で生きる場をつくる」というテーマは、本当に時宜を得たものだなと思っています。

今日、森様のお話も楽しみなのですが、午後からも学生さんたちの企画で分科会をされるということで、古田さんや寺岡さんといった起業された若い方、あるいは鳥取大学の大学病院のように、全国から看護師さんが集まってくるようなすばらしいワーク・ライフ・バランスの取り組みをされているところ、鳥取県を発信するすばらしい題材を取りそろえていただきました。鳥取大学は、地域の課題に向き合う地方大学として、例えば砂丘地農業~~研究~~を世界の乾燥地研究ということで、非常に大きな貢献をいただいておりますが、地域学においてもこのたび新しい機構もできたということですが、ぜひ全国のそういった課題を解決するために研究いただきまして発信をいただければというふうに思っております。

では、本日の大会、本当に成功になりますよう祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

Ⅱ．趣旨説明

○司会　どうもありがとうございました。

続きまして、地域学部研究会副会長の福田恵子教授より、大会趣旨について御説明申し上げます。よろしくお願いいたします。

○福田氏　皆様、おはようございます。ご参加いただきまして、ありがとうございます。

さて、今年のテーマは「地域で生きる場をつくる」です。皆様もお感じのことと思いますが、近年世界が大きく動き始めています。身近なところでは、北朝鮮からの核の脅威、地球の裏側では、アラブ、イスラム世界の紛争と難民の問題、それによってEU諸国も政治的な体制の変化を迫られています。そして、生活を守り、自治を求める動きも強くなってきました。アメリカでも新大統領の登場によって、アメリカファーストと声高に言われる、そういったように世界に大きな揺らぎが生じています。これらは、私たちの生活からは遠いことのように思えるのですが、見方を変えてみれば、良くも悪しくもその地で暮らす人々が、差し迫った問題に向き合いながら幸せに生きるために行った意思決定や行動、つまり私がどう生きたいのか、その暮らしの場をどうつくっていくのか、それが根底となった大きなうねりであるとも言えます。それは、日本に暮らす私たちにとっても言えることで、度重なる自然の災害はもとより、この度の衆議院選挙の論点とされるような大きな課題を幾つも抱えながら、私たちそれぞれが持つ暮らしの問題に向き合って日々を生きています。その中で、私も、そして私たちが共に幸せに生きられる場をどのようにつくっていけばよいのか、これを本大会の問いとして、皆様と一緒に考えてみたいと思います。

さて、本大会は、ここに示したように、まず森先生の基調講演、そしてゲストを囲んで進行する分科会、それから本大会をまとめ上げる総括セッションで構成しています。また、お昼にはポスターセッションも予定しております。このように進めて参りますが、ここに示しました4つの視点を大切にして学んでいきたいと思っております。

まず、私の今、ここという足元の生活からの視点です。それによって、私たちが抱えている課題や問題が具体性を持って見えてくることと思います。そして次に、歴史的な視点です。私たちの今の生活は、これまでの長い積み重ねの上に存在しています。過去からのつながりで今を見ることによって、より豊かな未来を展望することができると考えます。そして、私たちの生活は、仕組みや制度といった枠組みに規定されています。社会の仕組みがどのようであれば私たちがよりよく生きられるのか、その視点も意識しておきたいと思います。なぜなら、その仕組みをつくるのも私たちだからです。最後に、冒頭でもお話ししましたように、このような足元の私、私たちの世界での生き方が大きな世界につながっているという感覚を持ちたいと思います。

ここから本大会の内容について少しお話をいたします。まず、基調講演についてですが、森まゆみ先生に地域雑誌「谷中・根津・千駄木とその後」と題してご講演をいただきます。この雑誌は、1980年代の半ばに、森先生を含む20代の主婦の方々が始められた手づくりの雑誌です。自分の暮らしている地域がどんなところなのかという問いから始まって、長く住まれている方々から聞き書きをする、そうすると今の暮らしが深く豊かなものとして感じられる。それを雑誌にする、というプロセスそのものがつくり手のいきいきとした生きられる場であり、そしてそれを楽しみに待たれる人々と地域の豊かさを分かち合えることは、過去の人々をも巻き込んだ、共に生きる場であったのではないかと感じます。先生のご講演からは、その場や関係性がいかに築かれていったのか、それを学びたいと思っています。

分科会につきましては2つのテーマを準備していますが、それらは、学部必修科目の地域学総説の中で学生たちが考えた問いに基づいています。この問いは、学科を超えたチームごとに考えたものですが、それぞれの発表を通して学生たち自身が本大会の分科会のテーマとして選んだもので、本日の分科会の一つは学生が運営してくれます。では、学生たちに登壇してもらいましょう。

○学生　こんにちは。

○東氏　地域文化学科の東です。

○小嶋氏　地域環境学科の小嶋です。

○東氏　突然ですが、会場にいる皆さんに質問があります。鳥取が好きだという方、ちょっと手を挙げてみてもらえませんか。ありがとうございます。

では、もう一つ質問ですが、鳥取を初めとしたいわゆる地方と呼ばれるところは、若者の働く場所が少なかったり、お金を稼ぐのにはちょっと向いていないのではないかなというイメージがある方はいらっしゃいますか。やっぱり結構いらっしゃいますね、

ありがとうございます。

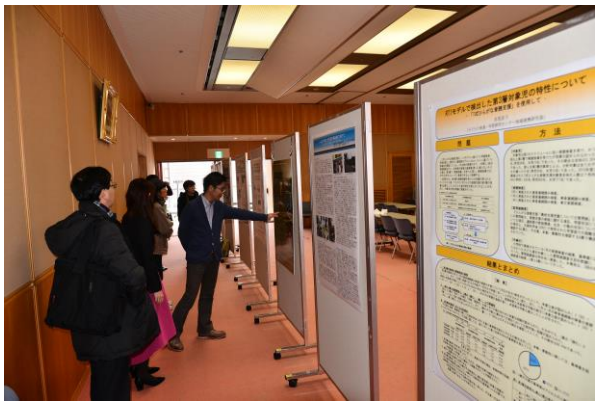
僕たちの班では、「一拠点居住vs二拠点居住」というのをテーマにしています。琴浦町で農家をされている寺岡さん、また鳥取と東京の二カ所を拠点にされて活動されている古田さん、はやぶさプロジェクトなんかを手がけている方です。その二人のゲストにお越しいただいて、学生たちや、それから会場の皆さんも交えながらトークしてもらおうという企画です。

○小嶋氏　今は、若者が都会に出ていって地方の過疎化が問題になっています。その理由は、先ほど皆さんにした質問みたいに、地方は稼げないというイメージにあると僕たちは考えました。お二人の話から、鳥取と東京に住むという生き方があること、地方でも稼ぐことができるという生き方があることを知ってもらおうという企画です。会場の皆さんからも質問を受ける時間もあります。問題解決の糸口を皆で探す分科会にできたらなと思います。1時半から第2会議室で行われますので、よろしければぜひお越しください。

○学生　ありがとうございました。（拍手）

○福田氏　分科会Aですが、実は分科会Bもありまして、負けていられません。

分科会Bですけれど、ワークライフバランスについて考える分科会です。今、盛んに働き方改革がいわれていますが、鳥取県中小企業労働相談所、みんな来る、「みなくる」の鈴木直子さんからは、そのあたりも含めて、制度的な側面からお話をいただきます。中小規模の職場の現状とか課題、それから個々の方々が抱えておられる問題など、具体的なお話を伺えることと思います。また、具体的な職場の例として、鳥取大学医学部附属病院のワークライフバランス支援センターの谷口美也子さんにご登壇いただきます。先進的に取り組まれて大きな成果を上げておられますが、センターが立ち上がった背景や、活動上でのご努力、これからの展望についてお話を伺います。湖山のキャンパスにもセンターをと、願わないではいられませんけれど、理事もいらっしゃいますので、熱い視線を注ぎながら期待したいと思います。それが可能となる、その条件とか課題がきっとどの職場にも通ずるヒント、そういうものだろうと思っております。



Ⅲ. 基調講演

「地域雑誌『谷根千』とその後」

森まゆみ氏（作家・編集者）

○司会　では、お待ちかねの基調講演です。本日の基調講演は、作家、編集者、東京大学客員教授、早稲田大学ジャーナリズム研究所招聘研究員、明治学院大学国際平和研究所研究員でいらっしゃいます、森まゆみ先生です。（拍手）

森先生には、「地域雑誌『谷根千』とその後」をテーマにご講演いただきます。森先生は、1984年、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』、略して『谷根千』を創刊、2009年の終刊まで編集を務められました。御専門は、地域史、近代女性史、まちづくり、アーカイブです。

森先生、それではよろしくお願いいたします。

○森氏　おはようございます。森まゆみです。先日ミャンマーから帰国し、体調がいま一つなのですが、頑張ります。

お手元に「はじまりの谷根千」というレジュメをお配りしてあるかと思います。

福田先生が、先程私たちの活動についてお話しくださいましたが、私たちは1984年10月に地域雑誌を始めました。それまでタウン誌という言葉はあったのですね。ただ多くのタウン誌が、のれん会とか商店とか、時にはディベロッパーなんかが自分たちのビジネスを成功させるためにつくった無料配布の雑誌であったのに対し、私たちは、自分たちが地域で生きていくことがより楽しく、生き生きとするような雑誌をつくりたいと思ったので、あえて地域雑誌と名付けました。本日、その一部を持ってきておりますのでご覧下さい。お金もない、ないないづくしの主婦たちが始めたものですから、はじめはカラーも使えず、非常にみすぼらしいものでした。なぜこのような活動を始めたかと言いますと、一つには、私たちの地域、谷根千は、現在地名として流通し、テレビでも雑誌でも頻繁に特集しているのですが、東京を襲った災厄から免れた地域だということがあります。1923年の関東大震災で、東京はほとんど焼けてしまったのです。特に下町のほう、墨田区、本所区、深川区などは焼けて、例えば本所の被服廠に逃げ込んだ4万人の方々がみんな焼け死ぬといった大惨事があったわけですね。そのとき、私たちの地域はほとんど焼けなかったのです。また、1945年の第二次世界大戦における米軍の空襲でも、東京が火の海と化す中、私たちの地域は意外にも焼け残ったのです。つまり、私たちの地域には、1923年の関東大震災前の建物がまだ残っていたのです。現在、谷根千はいいところだと言って多くの方が訪れ、取り上げられていますが、私から見ると、この30年で本当にたくさんの建物が壊されていったのです。私たちが『谷根千』を始めた84年頃に、そういった古い歴史と人格を持った家がどんどん壊されていくものですから、これをどうにか残せないか、なぜこのような大事なものを壊してしまうのだろう、その家にまつわる色々な歴史や暮らしの痕跡をきちんと記録できないか、壊されてしまうならせめて記録しようということで、私たち3人で始めました。

もう一人の仲間、山崎範子さんと私は、同じ保育園に子どもを預ける母親同士で、2人とも前職が出版社の編集者だったのです。地域の歴史を掘り起こし、定着させることで、自分たちが生きる場所に誇りや喜びを見出していきたいという思いは、私たちが、男女雇用機会均等法以前の、全く就職がなかった世代であることと関係があります。私たちが就職活動をした10年後、男女雇用機会均等法が成立し、総合職といった様々な形で大企業にも女性が入社できるようになりました。私の年で、時々大きな会社に入っている女性がいるのですが、聞いてみると、大体コネですね。コネクションがなければとても入れない。今日は女子学生の方もたくさんいらっしゃるので、ぜひ聞いてもらいたいのですが、私の高校の同級生、120人のうち、医者が20数人、弁護士が8人います。かなり進学校ではあったのですが、彼女たちは非常に賢くて、どうせこのまま大学に進んでも企業には入れないことを見越し、高校のときから、女性が差別されず、地位と収入が得られる職業につこうとして頑張っていたのですね。そういう先見の明が私にはなかったものですから、何となく4大を出て、やっと潜り込んだ小さな出版社で編集の仕事を覚え

たのですが、そのときはまだ結婚退職制、妊娠退職制がありました。現在は、女性にも産前産後の休暇が保障され、特に公務員の方たちは、その当時も働き続ける基盤があったかもしれません。しかし当時は、ある大企業の社長が、「丸の内に妊婦は似合わない」と発言するような時代でした。今こんなことを言ったら、その人はすぐ首ですよね。女の人が大企業に入るのは結婚相手を見つけるためで、結婚したら女性のほうが退職して当然、あるいは結婚後仕事を続けても妊娠したらやめるのが当然という、そういう時代を私たちは生きてきたわけです。だから、私も結婚する直前ぐらいに出版社をやめて、生活のために翻訳の下請や索引取り、年表づくりなど、色々なアルバイトをしながら、子供を保育園に預けて生きてきました。そこで出会った仲間と一緒に、これからは下積みの仕事だけをやるのではなく、主体性があり、地域で子供を育てることと両立できる仕事を見つけようということで、地域雑誌を始めました。

「小商いのすすめ」という言葉に従って、地域で小さなビジネスをつくろうということで『谷根千』を始めたわけですが、どのような方法を用いたかというと、様々な地域に暮らす自分たちの先輩をお訪ねして、この地域におもしろい人はいましたか、子供のころどこで遊びましたか、この道は何という名前ですか、といったことを、青焼きの地図を片手に聞いていくという形をとりました（写真1、2）。最初は地域の方に原稿を書いてもらおうと思ったのですが、誰も書いてくれないのですよ。作文というのが嫌いなのですね、みんな。作文トラウマになっているので、それならこちらから行って、話を聞いて書きとろうということになった。その後、江戸・東京ブームが起こり、法政大学総長になられた田中優子さんや、陣内秀信さん、藤森照信さん等が、江戸や東京について多くの本を出されましたが、そのころは本当に資料がなかった。そうでなくても、こんな小さな町について書かれた本はない。銀座文士交友録とか新宿何々というものはあっても、谷中・根津・千駄木なんて誰も知らないのです。谷中にはバス停しかなく、いまだに駅もないのです。そのように何も知られていない町だったのですが、調べてみると、現在谷中1～7丁目となっている場所には、それぞれゆかりのある古い町名がある（写真3）。だから、鳥取でも町のことを知ろうと思ったら、まず昔の町名とそのゆかりを調べてみて下さい。例えば、真島町という町名は、岡山の備中勝山の真島藩の三浦家の屋敷があったことに由来しています。それから初音1丁目、2丁目や、そこにある鶯谷という駅名は、昔京都から天皇の御子を寛永寺の住職として迎えて、徳川家の安泰を祈らせるという、公武合体のようなことをやっており、その宮様が江戸に来た折、京都のウグイスは雅な鳴き声なのに、江戸のウグイスは鳴き声が汚いといって、わざわざ京都からウグイスを取り寄せて放ったというのが由来だとか。まずそういうことから手探りで勉強していったわけです。私たちの活動を見た加藤秀俊さんという有名な研究者が、「あなたたちのやっていることは、幼児の砂いじりみたいなものですな」と言われたことを、今でも覚えています。まさに幼児の砂いじり。でも、幼児の砂いじりをしないと見えてこないものがあるのです。

谷中には、これだけ緑があるのです（写真4）。この緑の濃い所は天王寺の跡で、明治7年に、谷中新葬地と呼ばれる、都営の谷中霊園になった。これは戊辰戦争に負けたからですね。旧暦の慶応4年5月15日、上野戦争という最後の決戦を幕府軍と新政府軍が戦い、幕府軍が負けて彰義隊が敗走する。上野の寛永寺と天王寺は彰義隊の陣地となり、幕府軍を応援したというので、寺域をほとんど取り上げられて、明治政府がそこに大きな共同墓地を開いた。それまではお寺が寺請制度によって戸籍を管理していたのですが、これからは天皇を中心とする神の国でいくということで、神道の墓地が必要になってこういうものをつくった。その周りにある100ほどの寺にも色々ないわくがありますが、今も残っております。ですからこの辺りには、寺の門前に成立した町屋という性格があって、いまだにそれが町会の単位になっているわけです。

例えばこのように、2つのお寺がくっついたような形になっているのが、神仏習合の形で、片や経王殿、片や何々殿といって、仏式と神式に分かれているのですね（写真5）。これが大円寺という谷中のお寺ですが、『谷根千』を始める1984年に何かイベントをやろうということで、ここで菊まつりをやりました（写真6、7）。江戸から明治にかけて受け継がれていた団子坂の菊人形という、夏目漱石の「三四郎」や森鷗外の「青年」などにも描かれているものです。それから、ここに笠森お仙という、美しい茶店の娘がいたという歴史も思い出そうということで、「笠森お仙の手鞠歌」の復活を雑誌でも投げかけました。

これはもう少し後の雑誌ですが（写真8）、創刊号ではこんなふうにカラーが使えないので、表紙を色紙にして、たったの8ページでした。それをこのお祭りのときに売り出したところ、10,000部刷ったものが1日で全部売り切れまして、それからみんな、地域

の歴史を発掘する雑誌が出たらしいけれども、100円だったら私も10冊欲しいとか、近所の人にあげたいとか、遠い親戚に送りたいといって注文が来まして、結局1号目から1万6,000部売れたのです。だから、私たちは最初から赤字ではなかったのですね。1,000部を6万円ほどでつくって100円で売ったので、売上が10万円ぐらいあったのです。それでやっていくことができました。

これが仲間たちですが、雑誌だけでは売れないだろうということで、菊祭りにちなんで菊酒をつくりました（写真9）。私の友達の料理研究家につくり方を教わったのですが、少しおかんをして温めたお酒に、河岸で買ってきた菊をたくさんつけてそのにおいを移します。そして、不老長寿の菊酒といって売ったわけですが、そのときもお酒を仕入れるお金がなかったので、菊正宗の宣伝部に電話をしましたら、こもだるを飾ってくれるならお酒を6本寄附しましょうと言って下さり、それからずっと6本ずつ一升瓶をいただいてお酒をつくっています。こんなふうに、私たち主婦感覚ですから、無駄をしないで、知恵でもってお金のないところをしのいで今日までやってきています。

これは逢染川という川で、明治の頃の写真です（写真10）。自分たちの地域におけるランドマークというか、目立つものでみんなが覚えている、懐かしいと思っている、そういうものは何かと探して特集を組んできました。2号目はお風呂屋さんの特集で、3号目がこの逢染川の特集、4号目は和菓子屋さんの特集、5号目が森鷗外の特集でした。雑誌は連載がおもしろいということも大事ですが、寄せ集めのものばかり出していると、捨てられてしまいます。総力特集をして、この号を読めば逢染川についてはほとんどわかるとか、森鷗外についてはよくわかるという、そういうものをつくってきたのが捨てられなかった理由だったかと思います。最近、1号から全部そろって持っているという方が亡くなられたりすると、遺族の方がもう持ち切れないからといって連絡をくださることがあります。一方で、今ではとても全巻そろいが出ないものですから、一時古書価が大変高くなりました。そこで、全巻そろいが欲しい人には、もう要らないという方から譲っていただくようにしておりますが、そんなわけで、本がないうちに行っても『谷根千』だけはなぜか全部そろっているというようなことが多いのですね。

『谷根千』は、A5判の大きさで印刷しています。それはなぜかというと、タウン誌などで大き過ぎるものは、保管が難しいのですね。だから本棚に入り、女性のバッグにも忍ばせられるような大きさにしました。それから、『文藝春秋』や『世界』のように厚くするとまた保管しにくいので、コンパクトで薄いものにしました。また、保管してもらうためには、ほかの雑誌に載っていないことしか書かない。どこにでも載っているような情報は捨てられやすいので、私たちがオリジナルに発掘したものしか載せていません。そのために、聞き書きという手法を考えました。

どうやってデリバリーしていたかというと、雑誌を地域のお店に持っていき、置いてもらい売ってもらうと、2割のマージンが入るというシステムにしました。例えば『うえの』や『銀座百点』といった老舗のタウン誌は、力のある個店が支えているわけです。『うえの』という隣の町のタウン誌とは仲よくしているのですが、そこは毎号一つのお店から5万円ずつの参加費を取っているのですね。そのかわりのれん会や上野の商店会に入ることで、この店はいい店で老舗だよというお墨つきになるわけです。そしてレジのそばに置いておいて、お客さんにはただであげる。上野には、フルコースを食べて1万円、バッグを買ったら5万円というようなお店が多いから成り立つのですが、うちの町はメリヤスのパンツ300円、焼きそば1玉70円というお店ばかりなので、お客さんにただであげてくださいとは言えないのですね。だから私たちは『谷根千』を売れる雑誌にして、売ってもらったらマージンが入るというスタイルにしたわけです。これが長く続いた秘訣だと思います。

もう一つ大切なことは、配達と集金、帳簿つけをなおざりにしないということです。多くの場合、編集をしたり原稿を書きたいという人が同人誌をつくるものですから、配達・集金・帳簿つけができないのですね。それで『谷根千』も、最初のころ本屋さんに持っていって置いてもらおうとすると、大体断られたのです。同人誌みたいなのは必ずこうなるんだからさと言ってぱっと開けると、下に誰も引き取り手のない同人誌がいっぱいあるのですね。つまり、つくって配達しただけで集金に来ない、引き取りに来ないということですから、それでは雑誌がうまく続くわけはないのです。だから、世に3号雑誌と言われるように、3号しか続かない同人誌が多いのですね。私たちは逆にちゃんと配達して、次の号ができると集金に行って、それを全部帳簿につけて、銀行にお金を入れるというスタイルを維持しましたので、続いたと思います。

2号目ぐらいまでは、置いていただいたお店が20店だったのですが、最後には300店が『谷根千』を置

いてくださり、そこが全ての情報の窓口になる。だから、次に置きに行くと、「『谷根千』にはまだ裏の高橋さんのおじいちゃまの話が載っていないではないか、あそこに行ってみるといいよ」とか、この間買っていった人が、「こんなに薄いのにこんなに高いの」と言っていたよとか、いろんな反応がじかに聞けるのです。ですから、配達は雑用ではないのです。『谷根千』に参加したいと言ってくれた主婦の方や学生さんの多くは、取材や編集という知的な仕事だけをしたがるのですが、本当に大事なのは広告とりや配達・集金なのですね。それを自分でやらないと、町の声は聞けないと思います。それで、私たちもあるときから有限会社にして、事務所を安く借り、子供を次々産み育てながら26年やってきたということになります。

こちらの町の風景を見てください（写真11）。こんな古いアパートがあります。居住としては余りよくない。部屋が狭いから、家の中に洗濯機を置く場所がない。でも、外流しというものがあります。最近のマンションには、洗面台とキッチンにしか流しがないでしょう。これ本当に困るのです。例えば、長靴や泥のついた野菜を洗うために、昔の東京、特に職人さんが多かったところには必ず、外流しがあったものです。

これは谷中銀座といって、今大変にぎわっている漬物屋さんですが（写真12）、私たちの町の健全さというのは、そこでまだ物をつくっている人がいるということなのです。東京は消費社会で、遠くからフードマイルがかかるものを取り寄せて、ただ消費しているだけの町に思われていますが、実は私たちの地域には、はかり売りのお味噌や、手作りのおでん、自分のところで漬けた漬物を売っているお店があるのです。また職人さんも、げたを直す方から着物を縫う方まで様々いらっしゃいます。私があるとき、仕立て屋さんのいる長屋に行って、ちょうど外に出て体操をされていたので、「今、どんなお着物を縫っていらっしゃるんですか」と尋ねたら、藤純子さんの着物を縫っているとおっしゃいました。2号では、浩宮さんが生まれたときの産着を縫ったおばあちゃんを取材したのですが、なかなかおもしろいところです。ここでは、「へぎ」という薄い白木の板に値段を書いて売っているし、おつりはかごの中に入っていて、昔は新聞紙を切ったものでくるんでいたのかもしれませんが、今はプラスチックパックを使っています。

それから、地域の中には、このように井戸も残っていて（写真13）、歴史の調査だけでなく、地下水や水みち、植生、どのような動物が生息しているかも調べており、木の伝説や坂道も特集しています。これは本郷の菊坂下にある、樋口一葉が使っていた井戸です。明治29年に24歳で亡くなった、日本の近代を代表する、今5千円札の顔にもなっている樋口一葉さんが住んでいたときに使っていた井戸が、まだ残っているのです。このような形式の長屋にはパーキングがないため、長屋に突っ込むようにして車が置いてあったり（写真14）、干し物や周りに出ているものを見ると、ここには何人ぐらい、どんな嗜好の（例えば植えてある木から、竹あるいはアサガオあるいは菊が好きなのかなという、植物の好みを推測）方が住んでいるのかがわかるわけです。

私は、近代文学に関する本を随分書いているので、文学部出身だと思われるのですが、実は政治学出身なのです。さらに『谷根千』に携わるようになって、こういう建築の保存に随分取り組んだので、門前の小僧でいろんなことを覚えました。写真の右の家は、出桁づくりという形式の家です（写真15）。桁が出ていて、銅板がかぶさっているでしょう。これは当時における、最小限の防火のためのシステムです。それで銅を回しているのですが、それだけでは庶民もつまらないので、網代か何かの模様を打ち出していますよね。他にも、青海波や七宝つなぎなど、いろんな模様を打ち出しているところがあります。このようなものを、藤森照信さんが看板建築と命名しました。皆さん、これ何屋さんか読めますか。これはブリキ屋さんです。

私たちの時代は建物の保存に力を入れたのですが、次の世代の間ではリノベーションがとてもはやっています。この左のうちは、ちょうど家主が亡くなられたので、親子丼や卵焼きをつくる銅製の調理器具を売る銅壺屋さんであったお店を改修し、何と松坂屋が入ることになりました。皆さんはデパートで買い物をしますか。私も、子供のころは夏になると親に連れられて、デパートに行って夏服や麦わら帽子、レースのついたソックスなどを買ってもらって喜んでいたのですが、今や通販と、もっと安いスーパーができてしまって、みんなデパートに行かなくなったので、これからデパートをどうするかという戦略の研究を、この辺でやってみたいということらしいです。

これは根津にある朝日新聞の販売所ですが（写真16）、変わった門の形をしているので調べてみますと、北川楼という遊郭の建物だったことがわかりました。明治21年6月30日に根津から洲崎に越しているのですが、その建物がまだあるのです。遊郭の歴史を話

すと長いのでが、江戸では唯一吉原だけが、幕府公認の遊郭で、それだけでは足りませんでした。これもいいのだか悪いのだか、私は女性だから遊郭の存在を認めたくはないのですが、江戸という都市は圧倒的に男が多いのですね。なぜなら、まず参勤交代で出てくるでしょう。お殿様だけは、江戸屋敷に奥方なり側室がいますからいいのですが、ついてくる男の人たちは奥さんを故郷に残して単身赴任なわけです。さらに、伊勢屋とか三河屋といった地方から出てくる商人たち、これも単身で来るのです。そういうわけで、吉原だけでは足りず、多くの場合、神社やお寺の門前に、私娼窟あるいは岡場所と呼ばれるものができてくるのです。根津神社という、大きな神社の門前にできた遊郭の歴史を調べるだけでも大変おもしろいですね。江戸時代にいた有名な太夫の話や、三菱の岩崎弥太郎を振った遊女の話とか。明治になりますと、皆さんも高校の文学史で習ったと思いますが、「当世書生気質」や「小説神髄」を書いた坪内逍遥、この人は東大の学生だったのですが、根津の花魁にほれてしまって、通ったあげくに正妻にしたのです。前借を自分が払ってあげて遊女を解放し、妻にして一生守ったといういいお話もあるわけで、そういうことも調べるとおもしろいです。

ここは、日暮里にある経王寺というお寺ですが、彰義隊の戦争の弾の跡があります（写真17）。今年は夏目漱石や正岡子規、南方熊楠の生誕150年ですが（彼らは慶応3年生まれで、明治の年号と満年齢が一致するので覚えやすい）、彼らが生まれた翌年、旧暦慶応4年に、彰義隊による上野戦争が起こっています。このお寺に、幕府恩顧の者がいた彰義隊が逃げ込み、門を閉めたところを外側から、（私は官軍と言いたくないけれども）新政府軍が撃った弾の跡がまだ残っていて、触ることができます。そういうものが残っているということが地域の歴史なわけで、この門はこのまま残してほしいと願っています。

これはお寺の門前にできている、明治40年代の長屋です（写真18）。左側も同じような長屋だったときは、道の広さが倍近くあり、この路地を中心にみんなの生活が営まれていたわけですが、相続税が払えなくなった地主さんが大蔵省に物納してしまうと、今住んでいる人に「買いませんか」ということで土地を売ります。かなり安く手に入れたと思いますが、そうしてどうするかというと、自分のうちの敷地境のところまで塀を建ててしまったり、増築したりするわけです。そうすると、以前は2倍の広さがあり、みんなの生活空間、コミュニティーの空間であった路地が半分になってしまい、非常に窮屈な感じで分断されていくということが起きます。私たちは大学に所属していないから科研費などもらえませんので、トヨタ財団から研究助成という形で、とてもありがたい応援ををいただいて、路地の調査を3年間やりました。そして『谷根千路地事典』をつくって、五、六千部売ったのですが、それを見た住まいの図書館出版局が立派なハードカバーの本にしてくれて、それも何千部か売れました。路地というものがどのような構造を持ち、人々のコミュニティーや居場所、生きる場所をつくるのに大切な役目を果しているかということを調べました。その中のアイテムとして、先程のような井戸もあれば、みんなでお祭りをして初午などをやるお稲荷さんというほこらがあったりします。例えばこの写真では、右側にすだれがかかっていますが、こういうのれんやすだれは内側と外側を区切るようでありながら、まなざしを遮りつつ内や外の気配を感じることができるファジーな空間をつくっています。また、引き戸とドアはどう違うかとか、微妙に視線が通らないように扉や窓の位置が左右でずれているとか、あまり通り抜けしないように、入り口に少し段差を設けてあるとか、様々なことを調査しました。

これは、昭和初期にできた曙ハウスという文化アパートですが、「ハ」の字だけ木でできている看板が残っていて、他が取れているので修復してもらっています（写真19）。曙ハウスとは何だったのかを、聞き書きをして調べていきますと、大正時代に自由主義児童文学を掲載していた、『金の星』という雑誌を始めた斎藤佐次郎が建てたアパートだということがわかりました。

それから、この染物の丁子屋さん（写真20）、なぜこんなところに染物屋があるのかというと、この前の道が、先程逢染川が流れていた通りなので、その川を使って染物を水で洗ったりすすいだりできるわけです。このように、どのような商売がどこに起こるかということには、それなりの必然性があるのです。

私たちの地域には、ビーカーやフラスコをつくっている医療機械屋が大変多いのですね。なぜかというと、明治4年に行われたウィーンの万国博に、玉磨き職人が連れていかれて、レンズの磨き方を教わってきたからです。根津のあたりは水がいいし、光学を用いて磨いたレンズは、すぐ後ろにある東京大学で使ってもらえるので、クライアントが非常に近いのです。そういうわけで、今でも本郷には、いわしやといった有名な医療機械問屋が多いのです。そうしたレンズ工場の後継者を訪ね歩いて、いろんな資

料を発見しました。おもしろかったのは、朝倉さんという、レンズ磨きに行った職人の子孫に会ったら、カメオのブローチをたくさん持っていらしたことです。イタリアで、レンズ機械とカメオのブローチの両方を勉強したらしいのです。しかし、カメオのブローチはその後絶えてしまって、商売にならなかったので、レンズだけやってきたそうです。

建物だけ見ていてもいけないわけで、私は世界中どこに行っても、どんなうちに住んでいるか、何を食べているか、どんなものを着ているかという、衣食住をしっかり見ます。それに加えて、何を信じているか、余暇をどのように過ごしているかという、この5つぐらいを見ておくと、その土地、町の様子が理解できます。例えばこれは、谷中にある総持院というお寺の縁日に、信者さんたちが集まってきて観音経を上げているところです（写真21）。ここには、神奈川県にある、有名な大山阿夫利神社のお不動様と同木同作と伝えられるお不動様があって、目に効くと言われています。だから、ここに来ている人たちは目の悪い人たちなのですね。そんなふうに、足が悪い人が来るお寺や、大学受験に強いお寺、他にも胃腸に強い、虫封じという子どもの皮膚病に効くなど、様々なお寺が100ほどもあるのです。これらを結んで、体に御利益のあるお寺めぐりなんてコースを考えたりしましたが、早速ほかの雑誌にパクられました。そういう信仰の面、精神的なよりどころも、生きる場には必要なわけでしょう。

これは、諏方神社のお祭りです（写真22）。どんどん町は変わっていきますが、一番変わらないのが地形です。だから、団子坂という坂は変わらないし、昔橋のあったところには谷田橋薬局が残っているし、お寺や神社も変わりません。私は、三遊亭円朝の旅の跡を追いかけて『円朝ざんまい』という本を書いたのですが、驚くほど当時の様子はなくて、広く寂しい野原をとぼとぼ歩いて行くというところが、車の走る4号線という大きな道になっていたりして風情がないのですが、それでも神社やお寺は残っていました。皆さん御存じのように、神社の秋のお祭りで歌われる「村の鎮守の神様は」「きょうはめでたいお祭り日」という唄がありますが、まさに五穀豊穣、秋の収穫を祝う、神様に感謝をささげる日であるわけで、これは東京が農村でなくなっても残っているのです。実際にこの辺は昔、農村だったのです。これは井戸です（写真23）。

ここには巨大な屋敷があるのですが、蚊をよける殺虫剤をまく人たちにくっついて入ってみたところ、三千石の旗本の近藤家の跡でした（写真24）。これはその後、スポーツクラブになったのですが倒産し、残りの部分をどうするかということで、国や都にもお金を出してもらって、背後の崖の緑や芝生を残しながら谷中防災広場にしてもらい、みんなでピクニックやたこ揚げ、球蹴りを楽しんでいます。

これは雪見寺です（写真25）。江戸時代からあるお地蔵さんや、石仏墓標について調べたりしています。

『谷根千』を始めて2年もしないうちに、東京はいわゆるバブル経済に入っていきます。藤田観光の新しいマンションが等価交換でどんどんできていき、私たちの町は荒らされました。だから、『谷根千』を始めるとき不動産屋さんに、「これから地域の歴史を掘り起こす雑誌を始めるのです」と言ったら、「そんなものやったってだめだよ、もう少ししたらこの辺はみんなビルやマンションになるよ、今のうちに土地を買っておくと上がるよ」と言われたのですが、そんなお金もないから買うこともできず、あっという間に、表通りは容積率が変更されてマンションになっていきました（写真26）。

日本には住宅に関する法律がほとんどなくて、建築基準法と都市計画法だけですから、それをクリアしさえすればどんなものでも建ってしまいます。このときはもう歴史の研究どころではなく、木賃アパートに住んでいるひとり暮らしのお年寄りの方々は、みんな何がしかのお金をもらって追い出されていきました。放火もありましたし、火事で焼死した人もいました。容積率の緩和が行われていったので、このときは建物の保存なんかよりも、住民の保存、コミュニティーの保存を喫緊の課題として活動し、そのときに出会った方たちと今でも仲よくしています。五十風敬喜先生や、住宅問題に強い日置弁護士、神戸大学の早川先生、西山夘三先生のお弟子さんたちと一緒に、住民が生き残るための闘争をやってきたわけです。

ここには、平和地蔵がありました（写真27）。というのも、ここには以前お風呂屋さんがあって、炭や木を入れていた地下のコンクリートの燃料倉庫を、皆で防空壕として使っていました。そして、所の長屋の貧しい人たちが逃げ込んでいたところに直撃弾が当たり、23人の方が亡くなられたのです。戦後、その周囲にいた人たちが、平和地蔵尊と、第一・第二平和荘という小さな木賃アパートを作り、そこにお年寄りたちが住んでいたのですが、その人たちをみんなどかして、どんどん地上げをしていったわけです。鳥取にいらっしゃるとぴんとこないとは思うのですが、私たちの町の地価は、現在坪300万ぐらいですね。その頃は、何と住宅街で坪1,000万、表通り

は坪4,500万ぐらいになりました。もうそうなると、誰も住めないのですね。2DKの部屋の家賃が20何万もする、気の遠くなるような時代がありました。新しくできた1DKのマンションが1億円を超していたのです。だから、私たちもそのころは、もうこの地域に住めないのではないかと思いました。私も母子家庭なのに、月に22万円の家賃を払っていたことがあるのです。もう信じられないことで、ほとんど食べるためのお金が残らなかったのです。

これは、地上げ屋が平和地蔵を壊そうとしたので、周りにジェラルミンの塀を建てたところです。『谷根千』で「平和地蔵を守れ」というキャンペーンを張って、4号目か5号目では、宮武外骨という大正時代のジャーナリストのまねをして、これを壊したら神のたたりがあるぞという、たたり路線を使いました。

このとき、一人だけ残った荒物屋さんの御主人が孤立してしまい、あそこは意地張って売らないらしいとか、幾らでないと売らないと言っているらしいとかいう、地上げ屋が振りまくデマを土地の人が信じたりしたので、おじさんに話を聞いて、それを『谷根千』に載せました。おじさんは、「これは先祖伝来の私の土地であって、いつ売ろうが売らまいが自分の勝手だ、お年寄りがお金をもらって郊外に引っ越し、日の当たるうちに住むのはいいと思うが、私はまだ若く子供も小さいので、この土地で商売を続けたい」とおっしゃって、まことに正論なものですから、みんながおじさんを励ましに行ったり、買い物に行ったり、地上げに遭っている人たちが相談に行ったりということで、結局そこは壊せませんでした。業者が裏の道を塞いだので、通行地役権訴訟を起こし、私たちが取材したものや写真も証拠に使われて、おじさんは勝ったのです。

その後、半分には大きなビルが建ってしまったのですが、あるとき新聞を見て驚いたのが、地上げ屋の社長は、ラスベガスで殺さてしまったのです。皆さん、天網恢恢疎にして漏らさずという言葉を知っていますか。天の神様の網は穴が大きいように見えるけれども、ちゃんと見ていて、悪いことをする人は見逃さないんだぞという言葉で、まさにこういう地上げなんてことをして人を不幸に陥れた人には、決していい人生は待っていない。私はあまり人が殺されるのを喜ぶことはありませんが、地上げのお金でもうけて、ラスベガスに行って、賭博をやったあげくに殺されたのですから、このときばかりはやっぱりねと思いました。

現在も、この平和地蔵尊は場所を変えて存続していて、3月4日には地域で慰霊祭をしています。

昨日、東京大学でデジタルアーカイブのシンポジウムがありました。こういった戦争体験（空襲の体験や戦地における体験、学童集団疎開の体験）の記憶を呼び起こすものは、この近くでもほとんど見られなくなっているのですが、40数人が避難していた崖下の防空壕に直撃弾が当たり、上にあったお屋敷のプールみたいな水がめが倒壊して、全員が生き埋めになり亡くなった場所もあります。気の毒だからこういうことは早く忘れたいという人もいるかもしれませんが、例えば大阪市は、橋下さんが市長になる前だと思いますが、大阪大空襲で亡くなった方々一人一人の名前を明記する運動をやっていました。私たちもできる限り、地域の空襲の実態や、そこでどういう方が亡くなったのかを記録しています。

バブルが終わりますと地価が鎮静して、1,000万に上がったものがまた300万ぐらいに戻り、落ちついてまちづくりや保存ができるようになりました。これは柏湯という、文化元年に創業した、東京で最も古いと言われていたお風呂屋さんです（写真28）。廃業したのですが、壊すのはもったいないということで、第七病棟に壊されることを前提とした、「オルゴールの墓」という芝居をここでやりました。それが大変評判がよくて、現在、コンテンポラリーアート（現代美術）のギャラリーになっています。こういうものが幾つか残っていますと、それを見に来る人が増えますから、やはりお芝居やイベントやギャラリーが町にあるのは大事だと思います。

私たちの地域の隣には東京藝術大学があって、美術や音楽を専攻する人たちがたくさんいるのに、『谷根千』を始めたころは、一つもギャラリーがなかったのです。でも今は、40幾つあります。それらを結んだり、あるいは一般のおうちを使って、谷中芸工展を開催しています。

これは、私の檀家寺の光源寺さんです（写真29）。東京ですと、浅草寺の観音様で7月9、10日に開かれるほおずき市が有名ですが、光源寺の観音様でも戦前からほおずき市をやっていて、にぎわっていたらしいので、それを復活させようということで、ほおずき千成り市をやっています（写真30）。お寺さんもできるだけ性格のよい、威張らない御住職のいるお寺から説得して、寺の境内を使わせていただき、町に開いていただきました。先程ご紹介した菊まつりをしている大円寺の上に、全生庵という禅寺があります。ここには山岡鉄舟や三遊亭円朝のお墓があり、皆さん御存じかもしれませんが、中曽根首相をはじめとする首相たちが何かあると座禅を組みに行くお寺ですが、そこで圓朝まつりをしています。それか

ら、夏目漱石の「坊ちゃん」の最後に「清の墓は養源寺にある」としてその名が記されている養源寺でも、手創り市をやらせていただいています。また、谷中墓地では桜のころに、読者の方たちをお呼びして花見の会を催してきました。

私たちは、もう少し大きな建物の保存運動や、環境保全の運動にも取り組んできました。赤れんがの東京駅も、10万人の署名を集めて保存したわけですが、そういう近代建築とともに、この不忍池（写真31）、私たちの一番身近にある水辺空間を守ることも大切な課題でした。この池は、彰義隊が上野戦争を闘った寛永寺の敷地内（36万坪）にあったのですが、新政府ににらまれて、土地を全て取り上げられてしまい、恩賜上野公園という名前が残っているぐらいで、宮内庁博物局の所有となっていたのです。明治時代には、ここで競馬をやっていたのですね。日清・日露戦争を戦うために、強い馬を育てなければいけないということで、軍国主義政策の一環として、馬を改良すべく競馬をやっていたのです。横浜の根岸競馬場の次ぐらいに古い競馬場です。

この写真には、左のほうに精養軒という、明治の最初にできた洋食屋さん（ビルに入ってしまい不粋なのですが）、不忍池の弁天堂、その遠くに重要文化財である寛永寺の五重塔が写っており、まだ江戸らしい景観が保たれていることがわかります。大変多くの歌や詩がこの不忍池でつくられているのですが、この池の地下に、2,000台の巨大な駐車場をつくろうという計画が30年近く前にあったのです。促進していたのは、のれん会や上野の商店街からなる商工連盟で、私たちはこれに反対しました。上野駅は北の玄関と言われ、東北本線の出発口、ターミナルとして大変栄えたのですが、そのころの栄耀栄華をいま一度ということで、自分たちでは何の工夫もせず、駐車場がないから人が来ないんだという発想で、ここにつくろうとしたわけです。商店街は行政に強力なパイプを持っていますから、ほとんど決まりかけていたのですが、私たちは、ここでもたたり路線を用いました。不忍池には巨大な竜が棲んでいるという伝説がありまして、徳川家康を祭っている東照宮にある、左甚五郎の掘った竜が、夜な夜な池に水を飲みに来るということで、「不忍池に手をつけると龍神様のたたりがあるぞ」と訴えました（写真32）。どこからか、竜の扮装を借り出してきて、みんなで仮装行列をやりました。このとき、デモの届け出に行きましたら、どんな車を使うのか教えろというので、まだ子供が小さいころでしたから、乳母車を使いますと言いました。

同時に、不忍池の地下に流れている水みち、地下水を研究しようと、260幾つの井戸を地図の上に乗せて、水質などを調べました（写真33）。東京都の職員の方たちからなる、ソーラーシステム研究会と一緒に、市民でも簡単に使える井戸水の調査キットをつくって、温度やpH、有機溶剤や大腸菌群の有無などを調べました（写真34）。そうすると、私たちの町の、特に高台の深井戸の水は水質がよく、スーパーで売っている水よりもおいしくて安全だということがわかりまして、井戸水を飲む暮らしをしようということで、少なくとも煮沸してお茶を飲むのには問題はないので、私たちもずっと井戸水を汲んでは飲んでいました。

このころもまだバブルでしたが、ある崖下のおうちの裏庭に行きましたら、まだ湧水が湧いていました（写真35）。谷川俊太郎さんの詩に、「人間は地球のかさぶただ」という言葉があるのですが、私は、コンクリートは地球のかさぶたにすぎなくて、それを剥がせば、地球はちゃんと命の鼓動をしているのだと感じます。その湧水で、ホテイアオイや鯉や金魚を飼っている人がいました。

外国に行くときにはパネルやポスターを持っていき、不忍池国際写真展を各地でやりました（写真36）。また、日本在住の外国人の方たちも協力して闘ってくれました。カーター政権の文化庁長官をなさった女性の方が、ちょうど旦那さんの仕事で日本に駐在員夫人としていらしたので、彼女にも協力していただきました。

これは、根津神社の権現造の拝殿と門で、重要文化財に指定されています（写真37）。

これは、S字坂という名前の坂ですが（写真38）、森鷗外が「青年」という小説の中で、「坂はぞんざいにSの字を書いて曲がっている」と書いたことにその名の由来があります。残念ながら、この正面にある明治の建物も、左側にあった大正の建物も壊されてしまったのですが、後者は内田百閒が下宿していたうちです。

私たちは、不忍池や谷中五重塔といった大きな環境を守ると同時に、自分たちの小さな空間をいかに愛してつくっていくかを考えてきました。自分の家の門の脇にこんなものを置いて楽しんでいる方もありますし（写真39）、家の中に置く場所がないために、窓から顔を出して洗濯をすれば、道行く人とコミュニケーションができます（写真40）。

これは江戸時代の家です（写真41）。出し桁の厨子二階ですが、このうちへも、大阪資本が地上げに来たのですが、みんなで守る運動をやりまして、今も

残っています。ここにあるヒマラヤスギは、昭和30年代に放映された「姿三四郎」という柔道の映画のロケ地に生えていたものです。

それから、大きなものでは、近くにある日本最古のコンサートホール、これは明治23年に東京音楽学校が開校するときにつくられたもので、文部省の営繕にいた久留正道と山口半六が設計したものです（写真42）。これも壊されるところでしたので、音楽家や藝大の人たちと私たち地域住民が一緒になって、隣の上野公園に移築してもらいました。その中に設置されていたパイプオルガンも、日本最古のものです（写真43、44）。1851年のロンドンの万国博に出品された、シュルツェという人の作で、外国では国宝級の扱いを受けているものですが、これを紀州のお殿様で、音楽が大好きだった徳川頼貞が、麻布狸穴にある南葵楽堂という自分の奏楽堂（現在ロシア大使館のあるところ）に設置したのですね。ところが、設置直後に起こった関東大震災で音楽堂が大破しまして、もてあまされて東京音楽学校に寄附されました。すでに鳴らなくなっていたオルガンの音色をもう一度聴こうということで、募金活動をして、今も使われています。

『谷根千』の仲間の仰木ひろみは、もともとパイプオルガニストなので、ここでコンサートもやりました。ただ、弾き心地はなかなか難しいらしいですね。パイプオルガンは、NHKホールや聖マリアカテドラル教会などに入っているほか、バブルのころ、各自治体でパイプオルガンを買うことがはやって、様々なところに設置されているのですが、ほとんど使われていないのです。それらの多くは、エレクトリックアクションといって電気で動くのですが、ここのものはふいごで空気を送って音が出るので、タッチすると音が微妙にずれて鳴り、なかなか弾きにくいそうですが、元気に使われています。

それから、もう一つの大きな活動は、東京駅の保存。JR東日本はこれを復元して当初の形にしたので、現在の姿はこの写真とは違っています（写真45）。第二次世界大戦のときに空襲を受けて、3階建ての3階部分が焼けてしまい、屋根もきれいなドームだったのが、応急処置した三角屋根のままになっていたのを、保存運動によって復元させたわけです。ただ、JR東日本は、市民運動によって残ったということを言いたくないらしくて、当時の松田会長は、「森さんたちの活動によって残ったのだから、復元の暁には市民が残したというプレートを入れましょう」と言ってくださったのですが、それは実現されていません。

これは日本銀行協会という、渋沢栄一を憲章するためにつくられた銀行倶楽部です（写真46）。一部だけこのように残してあり、私たちはこれをかさぶた保存と呼んでいるのですが、現在は東京オリンピックに向けて全て壊しています。

先回りして言うと、2020年の東京オリンピックに、私は反対しています。最近東京では、オリンピックを返上すべきだという議論が非常に高まっています。それは、私たち住民にとって何もいいことがないからです。最近フランスの検察などが動いて、開催地を決める経緯に不正があり、買収の結果東京に決まったことが明らかにされています。鳥取の方たちには遠い世界のことに思われるかもしれませんが、これは国家プロジェクトですので、皆さんの税金も東京オリンピックに使われます。築地の市場を壊し、新国立競技場の大騒ぎがあり、今東京に来られると、ほとんどの駅でエレベーターの改修工事をしているので、みんな階段を上がらなければなりません。さらに、マラソンコースの整備などの名目で、並木もどんどん切っています。さらに、電線の地中化です。これは、明治のはじめに政府が出した、違式詿違条例（今でいう軽犯罪法のようなもの）を想起させます。外国から来るお客さんたちに、日本人が、裸で町を歩き、銭湯では混浴で、立ち小便をする未開の蛮人だと思われてはしゃくなので、そのような行為を取り締まる法律を作ったのと同様に、外国から来る人にいいところを見せたいために、東京を無電柱化しようとしているのですね。私は必ずしも、電柱を埋設することが悪いとは思わないのですが、民主主義的な手続きを経ずに、工事を発注してから説明会を開いたり、トランスを地上に置くためなどと言って並木を切ったりすることには反対です。最近、明治大学の脇のポプラ並木が30何本切られてしまったので、さすがに明治大学の先生たちが怒って、シンポジウムを行いまして、残りの木を切らせないようにしてくださっています。

話がもとに戻りますが、1996年に登録文化財制度ができました。ボトムアップのみんなの気持ちもあったと思いますが、文化庁にも頑張る人がいたのです。それ以前は、重要文化財を指定し、その中でも希少価値が高いものを国宝と呼んで保護してきたわけですが、それは主に、平安神宮や宇治の平等院をはじめとする寺社や、数百年経った民家などで、まだ二千何百棟だと思います。そうしている間に、私たちが大事に思っている身近な文化財や建物はどんどん壊されてしまう。昔は、そういうものをBC級文化財なんて呼んでいたのですが、そういうもののほ

うがみんなに愛されているわけですね。そういうものが壊されないようにするために、ボトムアップで登録していく制度をつくろうということで、登録文化財制度ができ、現在、1万棟を超える建物が登録されています。鳥取では、仁風閣などが重要文化財に指定されていますが、登録文化財もたくさんあると思います。

これは、根津にあるはん亭さんという串揚げ屋さんです（写真47）。大正3年創業のつま皮屋という、げたにかけるつま皮をつくっていた建物で、これも登録されています。登録すべきものはどんどん登録し、そういった建物をきちんと管理できるマネージャーを育てることが重要です。文化財ヘリテージマネージャー制度を使い、研修を受けて、資格を取ることも広まってきて、いい傾向だと思います。私も最初のころ、全くボランティアで建物の保存、活用にかかわる人がこんなにいることに驚いたのですが、リタイアされた後の人生において、仲間をつくり、生きがいを持ち、地域に生きる場を見出して頑張っていらっしゃる方たちが全国でふえています。もちろん若い人たちにもいますけれども。

この写真では、富士山が正面に見えています（写真48）。江戸という町の大きな価値は、富士が見えることで、葛飾北斎や歌川広重の絵にも、たくさんの富士山が描かれています。以前は、日本橋の駿河町が、銀座などよりもはるかに町としての格が高い一等地だったのですが、東京には19の富士見坂があって、唯一、地べたから富士山が見えるのが、この日暮里の諏方神社の前です。この風景を守ろうということで、富士見坂を守る会をつくって活動してきました。どんどん建物が立て込んできまして、左側の遠くに見えるのは東洋大学の建物で、大学と相談して、次はこういう建物をつくらないようにお願いしていますが、ついに左の稜線が隠れて見えなくなってしまいました。この問題について多くの人に興味を持ってもらうため、頂上に太陽が沈む日には、みんなで坂の上からダイヤモンド富士を見るという活動も行ってきました（写真49）。

また、本郷通りにできるワンルームマンションによって景観が遮られることがわかったので、どのぐらいの高さになるかを示すアドバルーンを上げて、注意を喚起したのですが、負けてしまいました（写真50）。ただそのときに、日暮里の町会長である、90歳になられる金子さん（つくだ煮屋の御主人）が、「ビルは永遠ではない。富士山は永遠にある。だから、次にあのビルが壊されるときには、またビルが建たないように今から運動していきましょうという。」とおっしゃって、みんな感動し、今も富士見坂の活動は続いています。地域内にネットワークができていますので、のこぎり屋根の工場を保存する運動など、必要があればすぐに始めることができます。

これは千駄木の、大田備中守の大名屋敷のある山林です（写真51）。登録されていたのですが、中が山林で、塀に遮られて見えなかったところを持ち主にお願いして、毎朝晩、鍵の開け閉めを仲間でしますからということで、現在は公開されています。当時の大名屋敷の遺構がそのまま残っている庭園で、近所の子供たちの散歩やネイチャースタディーの場になっています。

これは安田邸という、大正時代からある近代和風の建物で（写真52・53）、これも壊されてマンションになるところだったのですが、持ち主にお願いし、日本ナショナルトラストに寄附していただいたことで、持ち主は3億8,000万の相続税を減免することができ、建物は残り、いろんな意味でみんな喜んでいます。そこは現在、私の妹がヘリテージマネージャーを務めていますが、60人ぐらいのボランティアスタッフで、水曜日と土曜日に公開しています。

これは、はたきをつくる会や雑巾を縫う会から始めて、この家を磨いていこうということで、ボランティアで広大なうちを掃除しているところです（写真54）。持ち主は、みずほ銀行を創業した、安田財閥のおうちの方ですが、お年を召して、「おひな様もずっと出したことがないのよ」とおっしゃるので、蔵を掃除し、おひな様や五月人形を飾りました。そうしたらそのおひな様が、二代目永徳斎の名品であることがわかり、それを持ってアメリカまで行き、アメリカにある永徳斎の作品なども調査して、研究発表している人がいます。

不忍ブックストリートという、1箱の段ボールに、要らない本ではなくて、自分の売りたい本を入れて売ろうという運動も始めましたが（写真55）、これは日本中に伝播して、福岡や仙台など、あちこちで本好きの人たちのコミュニティーができています（写真56）。

これは先程ご紹介した谷中芸工展ですが、もう美術館という箱物は要らない、地域を美術館に見立てて、国際的な作家の作品から近所の女性たちがつくる手芸までを展示しようということで続けています（写真57、58、59）。この空き地は、空き地を使いたいという人に持ち主が貸し出しているのですが、宮大工の方たちが子どもたちに、日本建築の接ぎ方や、かんなを使った木の削り方などを伝える場になっています（写真60）。この芸工展も今年で20数回目にな

りました。

これは今、私たちが運営している「記憶の蔵」です（写真61、62、63）。『谷根千』が2009年に終刊しましたので、ここを掃除して、最初は健康クラブという名前で、地域の人の健康を守るためのステーションにしたのですが、最近は、1階をイベントスペースにして映画などを上映し、2階は、『谷根千』の活動を通じて集めた資料を使える場にしています。

これまでの活動についてお話しましたが、最近はデジタルアーカイブをつくっていますので、これをお見せしたいと思います。

『谷根千』が終わったとき、私たちは、膨大な資料をこれからどうやって整理して、みんなが使える形にしていくのかということに悩んでいました。そんな時、オリンピック絡みの文化イベントなどを企画するために、省庁が協力して、東京文化資源会議がつくられました。隈研吾さんや伊藤滋さんらが参加され、「東京の北や東のほうの町には様々な文化資源が眠っている」と言われました。皆さん、文化って何だと思いますか。文化庁と言う時にイメージされる、例えば演劇やバレエ、コンサート、美術展などは、人間の生活そのものから生み出されたもので、もとにある暮らしこそが広い意味では文化なわけです。ファインアートと言われるような、文化庁がこれまで支援してきたものは、氷山の一角にすぎない。海面下にあるものをどうやって見える化していくかということで、テストケースとして『谷根千』のデジタルアーカイブをつくることにしました。

この話が最初に来たとき、私は少しうさん臭いと感じました。これまで『谷根千』を、活字・紙の形でもう一回出したいという人はいたのですが、そういう人は、コンテンツをつくった皆さんには、印税を1～2割あげますと提案しました。一方、この人たちは、「本来こういうものをつくろうとすれば、何千万もあなたたちが払わなければならないのです」と言うので、私たちは、「コンテンツに関する権利は私たちにある」という形で、パイロットケースとしてやってみることにしました。

私たちには、自分たちで制作した「谷根千ねっと」というホームページがあります。雑誌が終わった後も、その後の調査や私のブログを「谷根千ねっと」に載せています。また、「映像谷根千」というものもあります。『谷根千』を始めたころは、まだインターネットが普及しておらず、ワープロが出始めた頃で、写真もフィルムで撮っていたので、たくさん撮れなかったし、動画を撮ることはまず考えられなかった。一度、高いお金を払って8ミリビデオを買ったのですが、さすがに両方はできなくて、活字で記録してきたわけですが、地域の古老たちには、映像で記録をし直したいという気持ちもありました。そこで、『谷根千』の「記憶の蔵」にあるものを、デジタルアーカイブ化していこうという話になりました。

確かに今であれば、『谷根千』という雑誌をつくって、苦労して300店配達して歩くよりも、ホームページをつくることで、地域資源に対する認識を共有し、地域の文化活動の拠点にしていこうという人たちも多いのですね。一方で、現在は私たちのころよりも、オールカラーの雑誌が大変安くできるので、若い人たちがおしゃれなものを全国でつくり始めています。これについては、『ローカルメディアのつくりかた』という、影山裕樹さんの本などもありますので、興味のある学生さんがいたら、ぜひ自分たちでつくってみてほしいと思います。

『谷根千』の紙面については、1から10までホームページで公開しています。見開きの形でどんどん読めますので、現物の情報に接することができるし、プリントアウトもできます。さらに東大の文書館や情報学館の方々が、原資料や私の書いた原稿やメモ、調査シートなどもデジタル化していこうと言われ、今のところパイロットで1から10までをやっています。

これが『谷根千』の目録データで、1号ごとに保存していた資料を全部スキャンしているのですが、この作業のために、NTTデータさんがAMLADというシステムを提供してくださいました。

といっても、協力してくださる方々は最近越してきた若者たちで、地域のことがわからないので、原資料にメタデータをつける作業を一緒にやっています。夜通し飲みながら作業しているのですが、これは字からすると誰が書いたんだとか、このときかかわっていた人はあの人だとかという話を延々しながらつくっています。

これを始めたときは、クエスチョンマークなところもあったのですが、やってみて私はよかったと思います。というのは、若い人たちの力が、私たちにとって資料を整理するきっかけや原動力になり、自分たちができないことをいろいろやってもらえるからです。それで私も、紀伊国屋書店の『scripta』という雑誌に、「30年後の谷根千」という連載を始めまして、1号ずつについて、そのとき取材した方々が今どうされているのかという追加調査を載せています。すごくおもしろいのですが、大体亡くなられているのが残念です。

菊まつりのときには、『谷根千』の原資料を展示し、

地域の人たちが気軽に見られるようにしましたが、これからも続けていきたいと思っています。

地域の若い人たちが、「今、谷根千という言葉が広く流通して、たくさんの人が来るようになったのは、やっぱり『谷根千』という雑誌ができたことがきっかけなんだよね」と言って、リスペクトしてくださって、彼らによる「はじまりの谷根千」というイベントが今日も行われています。

冗談で、「こんなことなら、特許とっときゃよかったな」と書いたのですが、実は雑誌についてだけは商標登録しているのです。ところが最近では、谷根千クリニックや谷根千食堂、谷根千歯科、谷根千接骨院など、たくさんできていまして、誰も私のところには挨拶に来ないので怒っていると、というのは嘘で、勝手に使ってくれるのはいいのですが、なぜ私たちが商標登録したかというと、後から『谷根千』を始めた人が先に商標登録してしまうと、私たちが『谷根千』を刊行できなくなるからです。雑誌だけでも10万円ぐらいかかるので、とても各分野（薬局だのクリニックだの）までは押さえ切れなかったということです。

これは、35歳の若者が管理している、HAGISOという建物で、最小文化拠点と彼は呼んでいます。彼は学生時代にこの萩荘というアパートに住み、建築を専攻していました。萩荘が取り壊されるということで、追い出されそうになったときに、萩寺（宋林寺）という家主にかけ合い、自分にリノベーションさせてくださいと願い出たわけです。その後、2階の6畳3部屋が3つのオフィスになり、1はカフェとギャラリーになって、大変な人気で、カフェには行列ができています。

先程、地方には仕事がないからいられないというお話があったのですが、私たちの地域でも、たくさんの若者が懸命に働き方を模索しています。東京には仕事があるかというと、そんなことはありません。現在、就職率はいいらしいけれども、皆さん御存じのように、東京大学を出て電通に入り、高い給料をもらっていた女性が自殺しましたよね。電通はブラック企業であって、幾ら給料がよくても、1日2時間も寝られないような暮らし方や働き方はおかしいのではないかということで、政府や省庁も「働き方改革」とか、「女性が輝く何々」とか、色々なことを言い出しています。逆に、谷根千という地域で、フリーランスで収入は少なくても、納得のできる生き方をしたいという動きは増えてきています。東京が大変なのは家賃の高さで、今でも2DKだったら12万ぐらいします。みんなそういうところには住めないから、シェアハウスをしたり、4畳半のアパートに住みながら、それでも納得のいく暮らしがしたいと願って生きている若者は多いのです。宮崎君は、日本版のアルベルゴディフーゾを実現したいということで、hanareという別の木賃アパートをお宿にして、ここのカフェをレセプションに、お風呂は地域の銭湯に、御飯は地域で食べてもらうという、イタリアの過疎地における文化・歴史を尊重した町ぐるみの宿の東京版をやろうとしています。最近、3店舗目のTAYORIというお総菜屋さんをつくったのですが、そこも大変おいしいです。なぜTAYORIかというと、そこに置いてあるものや売っているもの、おしょうゆでもお酒でもジャムでも、それがどこで、誰によってつくられているのかということをはっきりさせて、日本全国からの便りだというふうに見立て、お店を郵便局のような雰囲気にして経営しているのです。彼は35歳で、4つの店舗を経営しています。

昨今、箱物批判もあって、公共建築をたくさんつくれない中、隈研吾や坂茂といった有名な建築家たちが主だったコンペをとってしまって、若手の建築家がなかなか活躍できず、地域に入ってまちづくり寄りのことに取り組む現象が起こってきたと思います。

この「はじまりの谷根千」に合わせて、今まで活字で記録してきた人たちを映像で記録し直そうということで、私がインタビュアーとなって、谷中の乃池ずしの御主人の話を1時間たっぷりHAGISOで聞きました。この方は、「国鉄の中で組合をつくれ」というGHQの命令により、労働組合をつくって活動していたら、今度はレッドパージで追い出されてしまいました。東京に出てきて、仕方がないから芝居をやろうとして役者の勉強をしているうちに、おすし屋さんの役者仲間に頼まれて、日本橋の吉野鮨を再興しに行ったところから、すし屋の主人になってしまったという、ライフヒストリーを語ってくださいました。野池さんの言葉でとても印象に残っているのは、「町がよくならないと自分たちもよくならないと思って頑張ってきて、今日、自分の店は大変はやっているんだ」というものです。だから、誰かだけがよくなるまちづくりはもう終わりです。みんなが少しずつよくなり、楽しくなるまちづくりをやっていくしかないと思います。

これは、先ほどのSCAI THE BATHHOUSEを持っていた柏湯です。善光寺湯を持っていた松田さんという、この土地に7代で暮らす方の聞き書きや、金子さんというつくだ煮屋の御主人の映像も撮りました。これからHAGISOで毎月のように、地域で元気に暮

らしていらっしゃる年配の方たちのお話を聞いて、映像として記録する会を続けていこうと思っています。

このような形で今、地域文化資源デジタルアーカイブプロジェクトに取り組んでおりますので、最近の動きとしてお伝えしました。

宮本常一という民俗学者が、「記録されないものは記憶されない」という言葉を残していて、私はこの言葉が好きです。「記憶を記録に変える」と私たちはずっと言ってきたのですが、逆に言うと、記録しなければ、それはなかったことになってしまうのではないかと思います。そういうわけで、これからも地域に残る記憶を、できるだけ細かいところまで記録していきたいと思っています。どうも御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　森先生、豊富な資料をご用意いただいた上でのご講演、本当にありがとうございました。それでは、時間が限られておりますが、質疑応答に移ります。御質問のある方は挙手をお願いします。係の者がマイクを持って伺いますので、記録の関係上、御所属とお名前をおっしゃってから御質問をお願いします。

○会場発言　鳥取大学学生です。感想と質問になるのですが、まず『谷根千』について、森さんはお金がなかったとおっしゃっていたのですが、実際手にとってみると大変クオリティーが高くて、驚きました。少し前までは、古いものを壊して新しいものをどんどんつくるという時代だったと思いますが、今はリノベーションという言葉が普通に使われるように、古いものこそどこか新しくて、おしゃれで魅力を感じるという方も増えてきているのかなと個人的には思っています。そうした変化に合わせて、鳥取に移住される方も増えてきているのかなという感覚もあります。森さんもおっしゃったように、地方だから何もないとか、稼げないとか、「地方だから」というふうに物事を考える時代ももう終わるのではないかなと思っています。今だからこそ、森さんがお話されたことには、私自身も共感する部分が多いのですが、例えば20～30年前というのは、どちらかというと新しいもののほうにみんな引っ張られていたと思うので、活動を続けていく上で何が原動力となったのかを教えていただきたいと思います。

○森氏　何だろうな。やっぱり仲間がいたことかなと思いますね。それから、私自身が古いものが好きで、小学校の郷土史クラブに入っていて、おじいさんやおばあさんの話を聞くのが好きだったので、そちらのほうがおもしろくて。私はずっとお金がなくて、22歳から42歳まではパスポートも持っていなかったのですが、団体で海外旅行に行くよりも、自分の地域を旅するほうが楽しかったし、新しい発見が多かったのですよね。あとは、不必要なものはつくらせない、大事なものは残すというシンプルなポリシーでやってきました。だから、私はある意味すごく保守的なんだと感じます。考えてみたら、今まで池を守り、建物を守り、暮らしを守り、ずっと守るほうばっかりだから、余り革新的ではなかったかもしれないですが、少しずつ町が変わっていくのは仕方がないとしても、余りに急激な変化には、人はついていけないと思います。今の若い人たちは、生まれたときからパソコンやインターネットがあり、マンションや鉄筋コンクリートの建物で暮らしてきたから、逆にうちの子たちも、古い建物の床の間や廊下に新鮮さを感じるみたいです。ただ、若い方々はレトロに弱いと思うときもあって、余りおいしくなくても、古民家カフェや古民家居酒屋を、割とたやすくいいなと思ってしまうところもあるので、リノベーションがすごく単調になっていてつまらないと思うのです。リノベというとパターンがあって、白いペンキを塗って、素朴な感じの椅子を置いて、みたいなものが多くなっているので、若い方には、もっと多様なリノベーションを考えてもらいたいなと思っています。今、リノベーションで地域を変えているところはたくさんありますが、外国から入ってきた考え方は、日本ではねじ曲げられてしまうことが多いのです。中心市街地活性化は、もともとヨーロッパで始まった、インナーシティーをどう生き生きとさせるかという取り組みだったのですが、外国におけるインナーシティーの活性化は、とても多様だし人間らしいものです。日本ですと、駅前のいい感じの古い居酒屋街を全部潰して、大きなビルを建てて、テナントが入らなくて、また幽霊ビルになってしまうという繰り返しでしょう。そうではない方法を、今こそ若い方々に多様に考えてもらいたいと思います。

○司会　ありがとうございました。まだまだ伺いたいところですが、時間が迫っておりますので、森先生、本当にありがとうございました。皆さん、拍手をお願いいたします。（拍手）

○森氏　昼休みにもいますから、質問があったら個人的にどうぞ。ぜひ東京で谷根千を歩いてみてください。

○司会　ありがとうございました。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

ダイヤモンド富士を見よう！
49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

Ⅳ．分科会

分科会Ａ
「一拠点と二拠点―
２人の暮らし方から地域を考える」

［分科会Ａ概要］
ゲスト：寺岡昌一氏（てらおか農園代表）
　　古田琢也氏（㈱シーセブンハヤブサ社長）
企画・運営：地域学部3年生
　兼城賢翔氏・川口憂稀氏（地域政策学科）
　窪前志帆氏（地域教育学科）
　東寛章氏・和田真理子氏（地域文化学科）
　越田佳苗氏・小嶋太一氏（地域環境学科）
プログラム
　1.開会あいさつ
　2.ゲスト自己紹介
　3.テーマ1：働く
　4.テーマ2：暮らす
　5.ゲスト同士の相互質問
　6.学生へのメッセージ
　7.質疑応答
　8.総括

平成29年度前期に、鳥取大学地域学部4学科の3年生全員が必修の「地域学総説」の授業の中で、地域学研究会第8回大会における分科会の学生企画を立てるグループワークを行った。できあがった企画案を学生同士の投票で選考し、平成29年11月25日（土）に開催された大会で実際に実施したのが本分科会である。選考は、企画書による第1次投票で候補となったグループがプレゼンテーションを行った後、再度投票を行う形で行われた。

グループのメンバーは4学科から各1～2名ずつが加わるように配属され、グループワークは同じ地域学部に所属しながら専門分野の異なる学生同士が地域学について改めて議論し、考える場となった。

企画が選ばれた学生のグループは、学期終了後にミーティングを重ね、ゲストの選定やアポイントメント、当日の進行なども含め、一部教員の助言を受けながらも、基本的にすべて自主的に本企画の遂行にあたった。

分科会は、「一拠点と二拠点―2人の暮らし方から地域を考える」というテーマの下、大阪から鳥取（琴浦）に移住して農業を営む寺岡昌一氏（てらおか農園代表）と、鳥取（八頭）出身のデザイナーで東京と八頭を往復しながら活動している古田琢也氏（㈱シーセブンハヤブサ社長）を招き、お二人に対して学生が質問をしながらお話しを聞くトークセッション形式で進められた。

はじめの学生メンバーのあいさつでは、本分科会の趣旨について、鳥取という地域で働く、暮らすという選択肢の提案をしたいという説明があった。

そして、ゲストの寺岡氏、古田氏からそれぞれの自己紹介として、現在の取り組みとそれに至る経緯などのお話を伺った。

続いて、2つのサブテーマ「働く」「暮らす」に関し、学生2名がお二人に質問をする形でトークが展開された。

テーマ1「働く」では、寺岡氏が琴浦で地域の人とどのようにつながりをつくりながら農業をされているかといったことや、古田氏が二拠点で活動されていることのメリットやデメリットなどが話題となった。

テーマ2「暮らす」では、質問する学生が入れ替わり、予め用意されたスライドを使用しながら、古田氏の東京―鳥取の往復スケジュールの立て方や寺岡氏が鳥取に来られる前と後の暮らしの変化などについて話された。

両サブテーマについてのトークが終了すると、今度は寺岡氏と古田氏が相互に質問しあう形となった。寺岡氏から古田氏へは、東京の仕事と鳥取の仕事の関連や切り替え方法について質問があり、逆に古田氏から寺岡氏へは、鳥取へ移住する際の心境やいまの農業のやりがいについての質問があった。

最後に、お二人から学生へ向けたメッセージが送られた。寺岡氏からは、手近なところではなく遠くを見据えて歩んでほしい、古田氏からは、自分の可能性を見限ることなくどんどんアクションを起こしてほしいというメッセージであった。

学生メンバーによる総括では、自身がこの企画を通じて、敷かれたレールの上を走るだけの人生となっている現状を見直すきっかけとなったという感想が述べられた。

各プログラムの間に設けられた質疑の時間には、会場に訪れた学生や教員、一般参加者からも質問や意見が出され、全体として大変充実した分科会になった。

お忙しい中ご協力いただき、貴重なお話をしてくださった寺岡氏・古田氏及び当日ご来場いただいた参加者の皆さまにこの場をお借りして改めて御礼申し上げるとともに、企画の立案から実施までをやり遂げた学生たちに敬意を表したい。

（文責：竹内　潔）

Ⅳ．分科会

分科会Ａ
「一拠点と二拠点―
２人の暮らし方から地域を考える」

1. 開会あいさつ

○川口氏　お時間になりましたので、これから地域学研究会第 8 回大会、分科会学生企画、「一拠点と二拠点、2 人の暮らし方から地域を考える」を始めたいと思います。

きょうはお集まりいただきありがとうございます。前半の司会をさせていただきます、地域政策学科 3 回生、川口憂稀です。よろしくお願いいたします。（拍手）

まず初めに、学生挨拶ということで、窪前さん、お願いします。

○窪前氏　挨拶をさせていただく地域教育学科の窪前です。本日は御来場いただきありがとうございます。

私たちは、地域学総説という授業において、この分科会の企画をさせていただきました。地域をテーマに、今までの暮らし方：一拠点居住と、新たな暮らし方：二拠点居住という 2 つの暮らし方と働き方について着目しました。それから約 2 カ月間、きょうに至るまで準備をしました。それぞれアルバイトや部活等もあり、なかなか全員がそろうことができない中での準備でしたので至らない部分もあると思いますが、最後まで頑張りますのでよろしくお願いいたします。

今回の分科会を通して、鳥取で働く、暮らすという選択肢の提案をできたらと考えています。ぜひそういった観点でも参加していただけたらと思います。また、寺岡さんや古田さんのような方とお話をさせていただく機会、皆さんの前でこのような発表ができる機会をいただき感謝しています。

ここで、分科会の流れを説明したいと思います。この後、寺岡さんと古田さんに自己紹介をしていただきます。その後、「働く」について 30 分、「暮らす」について 30 分、お二方に学生司会を交えながらお話をしていただきます。それぞれのテーマに質疑応答の時間を設けますので、考えていただけるとありがたいです。そして、学生の総括をし、分科会を終わりにしたいと思います。

2. ゲスト自己紹介

(1) 寺岡氏自己紹介

○川口氏　それでは、早速ですが、お二人に 10 分ほどで自己紹介をしていただきます。

では、まずは、寺岡さんから、お願いします。

○寺岡氏　皆さん、こんにちは。琴浦町で農業をしています寺岡と申します。私は、平成 21 年に大阪から鳥取に農業研修生として来て、1 年勉強して就農し、それからずっと農業をやっています。少しずつ面積を広げ、現在では従業員を雇用してやっています。まだまだこれからも新しいところを求めながら地域の中で農業をしていきたいなと思っています。

私が来たリーマンショック後の時期と今現在では状況は違っていますが、なぜ大阪から鳥取に来て農業をしているのかといったあたりを、きょうはお話しできればと思います。

私は若いときから自分が思った仕事をとりあえずやってみようというチャレンジをしてきました。農業の前は、アパレル関係の仕事や不動産業など、どちらかというとお客さんに接する仕事をしてきました。

不動産と農業は土地という共通点はありますが、それまでの私と農業との関わりは、大根の種一つまいたことがなく、小学校のときにアサガオを授業でまいて、夏休みに持って帰るというようなことしかしたことがなかったのです。

大阪では都会にあるもので仕事をしていたので、鳥取で仕事をしようと決めたとき、今まで自分がやってきたノウハウやスキルとは全く通用しないだろうと思いました。そこで、鳥取で自分が生活していくにはどうしたらいいか、大阪にいるときにいろいろと調べました。

そのときに、鳥取県の「担い手育成機構」がちょうど 1 期生の募集をしていました。それをインターネットで見つけたのが締切間際だったので、すぐに電話をして応募し、その約 1 か月後にはもう鳥取で働き始めていました。

住むところは、当時インターネットではみつけら

れず、2 度ほど足を運んで、機構の人と一緒に家を探しました。家を見つけて住み始めると、すぐ農業研修に入り、それから 1 年、いろいろな農業のやり方を教えてもらって今に至っています。

作物は、初めはいろいろなものをつくってみましたが、今はスイカ、ブロッコリー、トマト、白ネギの 4 品目で農業をしています。基本的には農協のほうに全部出荷してますが、トマトは、自分で東京や大阪へ売り込んだりもしています。

琴浦町には「がぶりこ」というスイカがあるのをご存知でしょうか。黒い皮のスイカで、基本的に黒い種が中に入っておらず、そのままがぶっと食べられるので、「がぶりこ」といいます。旧東伯町でそういう新しい品種の取り組みが興ったのですが、高齢化などで栽培する人が少なくなっています。私の圃場では、こういう珍しいスイカの産地を守っていきたいということで、今は取り組んでいます。

ということで、農業を頑張っている寺岡です。よろしくお願いします。（拍手）

○川口氏　ありがとうございました。

(2) 古田氏自己紹介

○川口氏　続いて古田さん、お願いしてもよろしいでしょうか。

○古田氏　皆さん、こんにちは。きょうは、このような場にお招きいただき、ありがとうございます。テーマとなっている「一拠点と二拠点―2 人の暮らし方から地域を考える」についてですが、これからは人口が減っていき、働き方も大きく変わっていく、今はその転換期だと思います。「働き方改革」もあり、フリーランスの働き方や多拠点での働き方など選択肢が増えています。そのような中で、学生の皆さんにも何かしらプラスになるようなお話ができればと思っています。

私はもともと八頭町の八東の出身です。高校を卒業するまでは八頭町にいたのですが、大阪の専門学校に進学し、その後、就職で東京に行きました。東京ではデザイナーとして広告をつくる仕事などをしていて、26、7 歳で独立しました。

もともと、地元や地元の同級生・仲間が好きで、地元の仲間と何か一緒におもしろいことをしたいということを、高校を卒業してからずっと言っていました。そして、独立を契機に、それを実行することになりました。

初めは、「トリクミ」という団体をつくって、活動をし始め、今は隼という地域で HOME8823（ホームハヤブサ）という飲食店と、BASE8823（ベースハヤブサ）というゲストハウスをやっています。それが株式会社トリクミという会社で、私が社長をやっています。

HOME8823 は、地元の小学校のころからの同級生と始めた飲食店で、地域のいいものにちゃんと付加価値をつけて、地域の方々に食べてもらうという、地域に密着した地産地消のお店を目指しています。

BASE8823 いうゲストハウスのほうは、隼という地域が、スズキが出している「隼」という大型バイクのファンであるライダーさんたちが集う場所になっているのですが、彼らが泊まれる宿がなかったので、そういう宿をつくったらライダーさんたちがもっと来てくれるようになるのではないかと思い、始めました。

私たちの会社は、「大好きな仲間と大好きな町の未来を自分たちの手でつくる」ということを立ち上げ当初から掲げています。これから将来、5 年、10 年と進んでいく中で、社会のせいとか世の中のせいにするのではなくて、自分たちで楽しい町をつくっていこうという思いで、飲食業や宿をやっています。

今、メンバーは 8 人で、地元出身で東京から U ターンして戻ってきた人や奈良県から隼バイクが好きで隼の地に移住するというおもしろい人がいます。

一方、きょうは、株式会社シーセブンハヤブサの代表ということで私を紹介してもらいました。ここまでお話しした「トリクミ」の活動をやっていく中で、隼地域が盛り上がってきて、新たに立ち上げたのがシーセブンハヤブサという会社です。

2017 年 3 月に、隼小学校が廃校になりました。皆さんのまちでも廃校となる学校が出てきていると思います。今、日本全体で年間 500 校近くが廃校になっていると言われ、地方では大きな課題になってます。八頭町も例外ではなくて、市町村合併で廃校がどんどん出ていまして、その中の 1 校が隼小学校です。ここをどうにか使えないかということで、「隼 Lab.」（ハヤブサラボ）という施設に改修し、運営会社としてシーセブンハヤブサが立ち上がりました。

隼 Lab.の 2 階と 3 階はオフィススペースになり、12 社が入ります。1 階はパブリックスペースで、地域の方々や県内外の人たちが楽しめるような場所にしようとしています。

八頭町もこれから今までの時代とは違う町になる。人が減って、まちが変わってきている中で、今後どうやったら存続できるのかという地域の課題にチャレンジするようなことを、ここでやっています。

八頭町で自動運転の実験をやったり、ドローンの実験をやったり、地域の宅配課題を解決するような

チャレンジをしたりといった、田舎・ローカルからイノベーションを起こせるようなチャレンジをしていく場としてのステージが隼 Lab.です。ここが 12 月 10 日にオープンするので、ぜひ皆さん、来ていただけたらうれしいです。

今は、東京半分ぐらいと鳥取半分ぐらいで行ったり来たりして、そういった活動をしています。今でも東京のデザインの仕事は受けているのですが、そちらもきちんとこなしつつ、自分の地元をもっとおもしろい場所にしたいという思いで、新しいカルチャーというか文化をつくる活動を八頭町でしています。

きょうは皆さん、よろしくお願いします。（拍手）

○川口氏　お二人、ありがとうございました。

3. テーマ１：働く

(1) 寺岡氏への質問

○川口氏　それでは、分科会の内容に入っていきたいと思います。前半はテーマを「働く」として、お二人にそれぞれお話を伺ってから質問のお時間を設けたいと思います。進行係は引き続き、川口と。

○兼城氏　政策学科 3 年の兼城と申します。よろしくお願いします。

○川口氏　よろしくお願いします。（拍手）

では、寺岡さんに質問させていただきます。ほかの農家さんとの違いというのは何かあるのでしょうか。

○寺岡氏　そうですね。やっぱり当時、8 年ぐらい前の鳥取県の農業は家族でするのが主流で、経営規模がおよそ 1 ヘクタールぐらいの面積で、売上が 1,000 万円ということが多かったです。

今では、私のところの地域は特に変わったなと思います。私は 1 人で農業を始めましたが、1 人でできることには限界があって、ある程度、機械化していかないと利益が出てきません。利益が出てこないと農業は続けられない。これはどんな産業でもそうだと思いますが、ただでさえ天候に左右されて、あしたどうなるかわからないという状況になりやすい農業だからこそ、早目に機械化を図って、効率化をして、しっかり農業をやっていこうということで取り組んできました。

初めは、変わり者と言われていましたが、今は逆に雇用をとってどんどん農業をやっていこうという動きが多くなってきています。気がつけば、資本力があるところは、外国人も含めてどんどん人を雇用して農業してやろうというところが増えています。

琴浦町などの中部地区では、農地を確保するために借りるのも難しい状況になっています。ただそれは、自分の手が届くところ、目が届く地域だけで農業をしようという考え方があるので難しいのだと思います。もともと地盤がある方はコミュニティーもしっかりされているので、わりと近所でできるのですが、私のような県外から来ているものは、やはり少し離れたところの農地で声がかかって、つくりに行くという形になります。サラリーマン農業みたいですね。あちこちに会社があって、そこに仕事しに行くような農業をやっている、そこが大きく違うのかなと思います。

○川口氏　ありがとうございます。

先ほどやはり、県内、県外という話もあったのですが、農業に入っていくときも、ビジネスにおいて人とのつながりというのが大事になってくると思うのですが、やっぱり琴浦は人とのつながりはほかより強いですか。

○寺岡氏　そうですね。つながりは強いと思います。昔はみんなで太鼓をたたいて、みんなで畑に出て、みんなで田植えをするというのが農業のあり方で、今はそんなことはないのですが、やはり 1 人ではなかなかできない。一つの産地を守っていくということを例にとれば、1 人で鳥取県産のスイカが有名だといっても 1 軒の農家ではできないですから、熱烈な指導だったりとか、そのコミュニティーの中での情報交換や栽培技術を教えてもらったり教えてみたりという取り組みがあって、はじめてできる。ただ、これはどこの地域でも基本的に同じではないかなと思います。

○川口氏　関連ですが、琴浦町は農業を始めるのに入っていきやすかったでしょうか。あるいは、人とのつながりをつくりやすかったでしょうか。田舎は閉鎖的なイメージがあるのですが、どうでしたか。

○寺岡氏　そうですね。閉鎖的かどうかというのは個人の感じ方次第だと思いますが、基本的には、新しく入った人に対してはやはり基本的には警戒感がありますよね。でも、そこから人と違ったことを少し見せる、それを継続していくことで信頼を得ることができると思います。そういう意味では、琴浦町だから入りやすいとか、鳥取市だったらやりにくいとか、そういうことは基本的にはないのかなと思います。

ただ、どうしても農業は土地がありきなので、私が住んでいるところは浜というか海側で、町なので、農家が少ない。みんな働きに出ていて、私の集落で若い農家は私ともう 2 人ぐらいで、地域の担い手が少なく、これから農地がどんどんあいてくると思う

ので、入りやすい地域ではあるのかもしれません。

○川口氏　ありがとうございます。もう一つ、よろしいでしょうか。農業でもビジネスでも情報収集が大切だと思うのですが、その重要性や方法はどうですか。

○寺岡氏　そうですね。ありきたりですが、人から聞く情報というのは、なかなか都会にいるときみたいに最新の情報が飛び交っているような地域ではないので、なかなか入ってこないです。ただ、今は、インターネットで何でもできるようになっていて、8年前に比べると鳥取県でもある程度の情報が収集できるようになってきたのかなと感じています。入ってきた当時は、情報収集が全てインターネットで、鳥取県外の情報を引っ張ってきて、それを鳥取で実験するという形でした。

人と同じことをすること、その地域でやっていることをそのまま習得するということはもちろん大事ですが、衰退産業だと言われている農業が少しでも右肩が上がるようにするには、それを一つ踏み越えて、何かを変えていく、新しい技術を取り組んでみるとかチャレンジしてみるということをやっていかないといけないと思います。

そういう意味では、今は日本でも外国でもそうですが、どこかで古田さんのような取り組みをされている方がいらっしゃる。そういう方は必ず情報発信しているので、それを取り入れていくことはいつの時代も大事、農業に限らずどの産業でも大事なことなのではないかなと思います。

○川口氏　ありがとうございます。

農業と新しい手法を組み合わせていくというのがやっぱり大切なのだなと思いました。貴重なお話をありがとうございます。

(2)古田氏への質問

○川口氏　続いて、古田さんへ、よろしいでしょうか。

○兼城氏　兼城賢翔です。よろしくお願いします。

大学生なので、元気よくいきたいと思っています。参加者も大学生が多いと思うので、後の質問タイムでいろいろと聞いてもらえたらと思います。

では早速、古田さんに幾つか質問していきたいと思います。今、1カ月で半分ぐらい東京、鳥取という生活をされているそうですが、交通費も相当かかっていると思います。二拠点居住を続けるということに何かメリットがないとそこまでできないと思うのですが、そのメリットは何か、教えてください。

○古田氏　そうですね。メリットというと難しいのですが、確かに二拠点でやっていると言うと、交通費が高いのによくやるねと言われます。でも、その分得るものがあり、稼ぐことができればいいのかなと思っています。

私自身は東京の仕事もあるので二拠点でやっています。あとは、やはり情報感度のようなところですね。情報には、インターネットの情報とリアルな音とか空気とかにおいみたいなものというのがあると思っています。最初、こちら（鳥取）に全部移そうかなと思ったときもあったのですが、自分の仕事柄、どちらにいてもできるかなと思い、そういった情報の感度みたいなのをとりに行きたいなというので二拠点を続けているのです。その辺がメリットかなと思っています。

もう一点は、私自身がそんなに住む場所にこだわっておらず、別に二拠点をしているイメージというよりも、これが三拠点になっても四拠点になってもいいと思っています。もともといろいろなとこに行ってみたいという性分なので、こちらで仕事したりあちらで仕事したりでも何とかなると思ってやっています。

○兼城氏　ありがとうございます。

では、逆にデメリットを教えてください。

○古田氏　デメリットの1つは、今、地域に根づいてやっているのですが、例えば地域の飲み会に急にきょう来いよと言われても行けないことですね。小さなことかもしれないですが、これが大事で、メールだけではなくて、やはり顔と顔を合わせてコミュニケーションをとる必要があります。会社の中でも、社員とのコミュニケーションがちょっと薄れてしまうとかそういったデメリットはありますね。

○兼城氏　ありがとうございます。今、コミュニケーションというお話が出てきました。古田さんは隼Lab.で、例えば行政の方とも一緒に仕事をされ、ほかにも金融の会社なども巻き込んで活動されています。そういった関係者を巻き込むためには信頼関係が必要だと思いますが、その信頼関係をつくっていく上で、コミュニケーションが大事ということでしょうか。

○古田氏　そうですね。「巻き込む」のはすごく難しいです。シーセブンハヤブサも銀行や大手の会社さんも出資されていますが、信じてもらうために、本当にその思いを伝えるというか、何か賢くやり方を伝えるのではなくて、自分が何でこれやりたいのか、どれだけ腹をくくっているのかというのを伝えないと、人は動いてくれないなと思います。よく、地域に入っていくときに、なかなかわかってくれないと

かと言う人もいるのですが、わかってもらうためにはこちらが裏表なく話すしかないと思います。

それから、これは今だから言えることですが、やはり結果を出すしかないと思っています。若者が何か新しいことをやろうとすると、「この若造が」と言われることも多々あるのですが、でもその人たちに何を言われても、「いや、絶対私はやるので信じてくださいと言ってそれをちゃんと結果として出せるか。だから、最初のころはイベント1つ打つのも、絶対1回でも失敗できないと思ってやっていて、例えば集客ができなかったとすれば、できなかったのではなくてやっていないだけでしかない、という気持ちでやっていました。

大きなことをやってやるんだと言うからこそ、1つ1つきちんと、小さいことから確実に丁寧に結果を出していって、やっとそれで人がついてきてくれる。それなら、一緒に何かやろうかと言ってくれるようになるのかなと。最初から巻き込むことを意識し過ぎても巻き込めないのではないかと思いますね。

○兼城氏　ありがとうございます。

では、そうですね。時間的に最後の質問になると思うのですが、八頭町は、言い方はあまりよくないかもしれませんが、「山奥」だと思います。僕もよく行っているのですが、そういう地域で、本当に稼げるのかというところが気になります。

会場の皆さんにお聞きします。八頭町のような山奥でも稼げると思う人は、手を挙げてください。結構おられますね。

皆さん気になっていると思うので、単刀直入に聞いてみたいと思うのですが、古田さんは、稼いでいますか。

○古田氏　まあ、ほどほどに。

○兼城氏　なるほど。

○古田氏　稼ぐというのを、どこに基準を置くかにもよると思います。1,000万が稼いでいるのか、1億が稼いでいるのか、10億が稼いでいるのか、給料が幾らだったら稼いでいるのか。でも、どこにいても自分のやり方で稼げる時代にはなってきているのかなと思っています。

○兼城氏　ありがとうございます。古田さんは、好きな友達と一生懸命やりたいということを実現し、いつもわくわくした表情で楽しそうに仕事をされているように思います。一方、私の周りの大学生は公務員志向が強いのではないかと思います。もちろんとてもよい職業だなと思うのですが、古田さんのように、やりたいこととか、好きなことを仕事にされている方もいるんだなというのをきょう、新しく知っていただけたらなと思いました。

(3)会場からの質問

○兼城氏　ここから10分程度、ぜひ参加者の皆さんからも何か、お2人への質問があれば受け付けたいと思います。質問がある方は挙手していただけますか。

○会場発言　古田さんに質問します。

大江ノ郷というのがありますね。あそこは県外からもたくさんの客を集めて、土曜日、日曜日、平日関係なくはやっています。私も時々行きます。すると、店内は新宿の店にいるようなムードがあるのですが、周囲の山々見ると変哲がないのです。なぜあれだけ若者を県外から引き寄せるのでしょうか。

それから、その近くにキノコ園がありますね。あんな山奥へキノコ生産で成功している。

そういうことから思うのですけれども、企業はアイデアさえあれば宣伝があればどこでも成り立つのではないかと思いますが、いかがですか。

○古田氏　はい。まさに私もそう思っています。まさに大江ノ郷さんは、年間何十万人というところで、1つ目の質問は、そこがなぜはやっているかというところですよね。

やっぱり1つには情報発信とブランドづくりかなと思っています。ブランディングと最近よく言われると思いますが、ブランドのつくり方がとてもうまいなと思うのと、やはり社長自身がぶれずに、金もうけ主義に走らずに着実に取り組んでこられていて、あそこまでいくのに何十年もかかっているようなので、そのあたりを常に学ばせていただいています。

キノコ園さんも大江さんもそうですし、場所に関係なくいいものをちゃんとつくってちゃんと発信すれば、今のこの時代、情報が誰でもとりやすい時代になっているので、勝負はできるなと思っています。

私もやっぱりそういう思いがあったので、東京だけの仕事だけではなくてやはり鳥取で、八頭で挑戦してみようと思っていて、まさにその大江ノ郷さんとかキノコ園さんのような会社があると、若い子もやる気になり、夢を持つことができ、どこでもチャレンジできるのようになるのではないかなと思っています。

○兼城氏　ありがとうございます。

まだ時間あるので、ほかに。では、奥の方お願いします。

○会場発言　鳥取大学地域学部の教員ですが、実はこれ学生から質問されて私が答えられなかったようなことで、そのことについて、そういう実践という

か生活の仕方をしとられる方にお話を伺ったので、ちょっと伺ってみたいということです。

具体的にどういうことかというと、伊藤洋志さんという方の「ナリワイをつくる」という本を学生と一緒に読みました。本の内容から言いますと、都会のような生活費の高いところよりも地方のほうが、収入は減っても生活費も安いから暮らしていけるだろうと。しかも企業に勤め、会社に勤めるということではなくて、自分のできること、自分の得意なことで収入を得て、それで年間の収入を確保して暮らしていけば、地方でも暮らせるだろうという提案でした。

それを学生と一緒に読んだときに最終的に学生から出た質問が、夫婦2人だったら暮らしていけるだろう、それから結婚して子供が高校までだったらば地元の高校に進学させられるだろう。ただ、子供がどうしても大学に行って学びたいといって都会に出るとかよそに出るということになったときに、子供の学資が出せるだけの収入が得られそうにない。どうしましょうという質問でした。

とても現実的だけれども、若い人にとっては少し将来のことを考えるとそこまで考えるのだろうなということを思いました。そのことについて近い実践をしておられるお二人の方は、どういうふうにお考え、あるいはどういうふうに答えられるだろうかなということを教えていただきたいのですけれども。

○寺岡氏　では、私から。私もまだ小さな子供がいますが、大学になってくると、国立なら助かりますが、私学なるとたくさん要るといった問題はあると思っています。

そこで私が頑張るしかないなとは思うのですが、私が一緒に働いていたお父さん世代ですね、先輩の方たち皆さんそうだと思いますが、都会にでサラリーマンをしていたら決まった給料しかもらえないですよね。今の生活があって、学資保険をかけているのかもしれませんが、ある時にかかるものが突然かかってくるのですよね。そこをみんなどうにかやりくりするというのを多分されていたと思うのです。

きょうは学生さんが多いので明るい話にしたいという話だったのですが、学費を払うために消費者金融からお金を借りて学費に充てている方もいます。もう少しで卒業してくれるといって頑張っても、今度は就職が決まらないということもあります。

私がこれから将来どうなるかわからないですけれども、今のご質問では、将来の学資が心配だというお話しでした。心配する必要はないですよね、しっかり働けばいいだけですから。働きに行くのだったら、労働でしかお金は変えられないですから。もうそれしかないです。

そうではなくて、こういう田舎で、人よりも少し頑張って何かをするのなら、やはり自分から動き出さないといけないと思います。何でもいいのですが、副業、ダブルワークでも構わないです。そういうことを、子供ができたらどう大変だとかではなくて、子供ができてそれを育てていくというのは結局のところは生活していくということだから、将来について心配する必要は田舎だからとかは関係ないと思います。また、田舎では生活費が少ない分だけ貯蓄もできると思います。

○兼城氏　ありがとうございます。

○古田氏　子供のことは、よく考えます。私たちも若いメンバーでやり始めて、最近子供が生まれたメンバーもいます。でも、結局どの職業についてもリスクは一緒なのかなと思っています。

それこそ三洋が経営難になるとは、おそらく誰も思っていなかったとおもいます。三洋に勤めていた方も多分安泰だと思っていましたよね？今の時代は大手だから安泰という時代ではなくなってきてるとおもいます。

例えば、今、私も幾ら稼いでいますといっても、それの桁が足らないぐらいの借金、借金というか会社の借り入れがあるわけで、会社が潰れた瞬間というのは、子供を大学に行かせられないかもしれない、消費者金融に行かないといけないかもしれないとか思います。

それこそ公務員だって、今、本当にこれだけの人数が要るのかという話になっている中、人口がもっと減っていくと、もしかするとリストラ対象のようなことになるかもしれないし、採用もしないという状態になるかもしれない。

そうなってくると、好きなことをやる人たちだけがリスクを心配するのかといったら私はそうでもないと思っていて、大手、大企業に入っている方々も実際にリスクがあります。例えば私の知り合いの社長さんは1回上場して、何十億という資産があった中で、リーマンショックが来て大赤字になって、自己破産して、今また再起しているという人もいるのですが、その方も子供がいるのですね。

だから、結論は、結局、自分がどんな人生を腹をくくって歩むかということなのだと思います。

○兼城氏　ありがとうございました。

この会が始まる前に、みんなで集まって、きょうは楽しい会にするぞと言ったのですが、ある意味すごくリアルなところが見えてました。

○古田氏　すみません、とても重たい話になってしまいましたね。

○兼城氏　まとめると、やりたいことはやるけれども、リスクもちゃんととっていこうということだったかと思います。

一旦ここで「働く」をテーマにしたセッションは終わりにしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

4. テーマ２：暮らす

(1) 古田氏への質問

○東氏　では、かわりまして、これから第 2 部の「暮らす」というテーマをもとに話していきたいと思います。ここからは、後ろのスクリーンのほうで図表を見ていきながら、さらにお二人のお話を掘り下げていけたらなと思っております。

今、こちらに映し出されているのは、古田さんの 10 月の 1 カ月間のスケジュールです。カレンダーの表にしていただいています。こちらを見てもらうとわかると思いますが、黄色のところが東京にいる期間、青色のところが鳥取にいる期間ということです。これがほぼ 15 日ずつ。あと、こちら、出張で兵庫に行っているのが 2 日と、本当に半々という結果になっています。それで、こちらの表を見てもらうとわかるのですが、週末に東京が大体集中していまして、ここから質問ですけれども、どういうルーチンというかペース配分を持って決定されているのでしょうか。

○古田氏　以前は 10 日いて 10 日向こうにいるという形だったのですが、結婚してからは、極力土日は向こうに行って、それに合わせて打ち合わせを入れるという具合です。あと、今は隼 Lab.のことをやっているので、平日は何かあったときにすぐ動けるように鳥取にいて、土、日、月で向こうの打ち合わせや営業活動ですね。企業を誘致するために人に会ったりしています。

○東氏　ありがとうございます。

それから、もう一つ質問があります。今、学生の中で、二拠点居住に興味が出ている人もいると思うのですね。その中で、素朴に「疲れませんか」と疑問に思います。東京、鳥取、東京、鳥取というふうに移動されているわけですけれども、この暮らし方、先ほど交通費のお話も出ましたが、体力的に疲れないかなということが気になりました。どうでしょうか。

○古田氏　最初のころはかなり疲れていましたが、もう最近は全然疲れないですね。逆に今は楽しいです。

○東氏　やっぱり慣れてくると、そのルーチンを含めて大丈夫になってくるのでしょうか。

○古田氏　そうですね。

○東氏　では、もう一つだけ。やはり社会人になって働き始めたころ、今までの話を聞いていると何となくわかるのですが、こういう生活になると想像していましたか。なるかもしれないという漠然とした予想はありましたか。

○古田氏　いや、全く想像していませんでした。地域のことをやるということも考えておらず、デザイナーで何とかやっていこうと思っていました。でも気づいたらなっていました。

ただ、独立してすぐの頃、単なるデザイナーというよりも二拠点居住のデュアルライフをやっているデザイナーのほうが何か仕事が来そうかなというある種ブランディングは少し考えました。

鳥取の、例えば、アクシスさんや旺方さんなど、今、元気な社長さんは私より行き来しているはずです。私よりも二拠点をやられている方は大勢いるのですが、あえて二拠点居住をやっていますと最初のころにブランディングして、そうしたら、いろんなところに呼んでもらえるようになりました。

○東氏　やはり、いまのお話しだと、なるようになっていって、でも、その状況をブランディングなどに生かしていくという形ですね。ありがとうございます。

(2) 寺岡氏への質問

○東氏　では、続きまして、寺岡さんのほうの質問に移っていきたいと思います。

○越田氏　地域環境学科の越田と申します。よろしくお願いします。

では、スライドお願いします。

こちら、寺岡さんの自分史の年表を書いていただきまして、まとめさせていただいています。鳥取に来られるまでに、人生の転機が２つ表示されているのですが、これについてちょっとお伺いしてもよろしいでしょうか。

○寺岡氏　転機 1 ですけれども、この頃アパレルの営業をしていたのですが、会社が時間内にきっちり終わる会社でした。

そこで、会社が終わったあとに何かやることがないかなと考えていて、飲食業をやってみたいなということをふと思って、飲食業のアルバイトを始めました。そのとき、入った初日に、それこそ皆さんのような大学生のバイトリーダーが、私のやったこと

に対して「誰がこんなことを教えたんだ」と、私に仕事のやり方を教えてくれた女性を突然叱りつけるということがありました。

ちなみに、アパレルのところでやっていた営業もちゃんと役職がついていて、部下も何人かいる立場でしたが、このアルバイトで、初めてで初日なのに、わかるわけないだろうという状況で突然、大学生に怒られたわけです。私は負けず嫌いなので、頭にきて、その分必死で仕事をして、1 年でその大学生からバイトリーダーの座を奪い取り、最終的には仲よくなりました。その子も就職して、営業成績が高くなっているようなので、やっぱりすごい子だなと思っています。

そのとき、若い大学生たちからすごいエネルギーを感じ、考え方が変わりました。それまでの自分の仕事は8時から5時までしっかり働いたら終わりで、望まれる成績やノルマをそれなりに上げておけばいいと思っていたのですが、いや、そうではないんだなと思うようになりました。

そう思っていたら、ちょうど知り合いの不動産会社の社長さんに、人が足らないから来てくれないかと言われて、おもしろそうだからやってみようかなと思い、アパレルの営業と飲食業をやめて、不動産業界に飛び込みました。

○越田氏　転機 2 のほうもいいですか。

○寺岡氏　はい。不動産会社に私がいたのがちょうどリーマンショックの頃です。小さい会社で、お客さんと売り物件を両方探してきてマッチングするという営業で、不動産の中では一番難しいと言われる業態でした。マンションとか売りビルを 1 棟丸ごと売買するという営業でしたが、そういうことをする人というのはとてもお金持ちなのです。

これをやって、そのときに知り合ったお客さん、出会ったお客さんの中には、ポケットから大金が出てくるような人たちがいて、そういう人が世の中には実はたくさんいるということを知りました。そういう人たちと切った張ったのやりとりをしているときに、いい意味で金銭感覚が壊れてしまいました。何百万とか何千万を手で折って数えなければいけない取引などをしていると、だんだん月々20 万ぐらいの給料がどうでもよくなっていきました。営業成績もそこそこあって、リーマンショックの波もあったのですけれども、それでも契約はとれていたので、別に何も気にしていませんでした。

そんな中、当時の婚約者、今の家内が鳥取出身で、鳥取に帰りたいというので、鳥取に来ることになりました。

○越田氏　ありがとうございます。

次のスライドをお願いします。こちらも書いていただいたものですが、大阪時代と現在の生活費の出費の内訳になります。見ていただいたらわかるのですけれども、大阪時代は遊びと貯金が多く、今は設備投資や運転資金というのが主になっています。この大阪時代は自分へのお金ということでしょうか。

○寺岡氏　そうですね。この大阪時代の遊びも設備投資です（笑声）

○越田氏　ある意味の。

○寺岡氏　そうですね。はい。どうしても職業柄いろんな情報をとる必要があります。先ほど古田さんが肌で感じる情報というのを言われて、ああ、大阪のときそういうことがあったなと思ったのですが、そういう情報を得るには、遊興費と書いているのですけれども、営業活動ですよね。自分の給料の中で営業をかけていたので、どうしてもこういう形になります。あと、ひとり暮らしだったので、生活費は固定費としてかなりかかっていました。

○越田氏　では、大阪時代の、そういう経験が今に生かされているようなところもあるということですか。

○寺岡氏　そうですね。自由にできるお金は今のほうが少ないですが、いい意味でお金の感覚がちょっとずれているというのは生かされていると思います。

○越田氏　ありがとうございます。では、お時間が来ましたので、これで 2 人の暮らしについて掘り下げるところは終わらせていただきます。

5. ゲスト同士の相互質問

(1) 寺岡氏から古田氏への質問

○越田氏　続いて、寺岡さんから古田さん、古田さんから寺岡さんへの質問の時間としたいと思います。

今までのお話しの中で、お二人がお互いにここは共感できるなとか、ここはちょっと違うという部分がきっとあったと思いますので、そういうことについて何か質問をしていただければと思います。

まずは、寺岡さんから古田さんにお願いできますか。

○寺岡氏　きょう、お話を聞かせてもらって、大阪にいたときの感覚とすごく共感するというか、忘れたことを思い出させてもらったという意味で、すごく勉強になりました。

質問ですが、東京の仕事と八頭でされている仕事は、全部一貫して同じ流れのものなのでしょうか。どうしても移動がある分、全部、連動してされているのでしょうか。

○古田氏　そうですね。業種は少し違うのですが、株式会社トリクミで受けているので、一貫しています。最初のころは、自分の仕事は個人事業、独立したデザイン会社のほうでやっていて、トリクミはトリクミだったのですが、今はもう一緒にしています。

○寺岡氏　頭のスイッチの切り変え方があったら教えてほしいのですが。

○古田氏　はい。「移動」かなと思いますね。移動するときにスイッチが切りかわったり、やっぱりああしようとか、アイデアがでたりしますね。でも、切りかえは難しいですね。

○寺岡氏　やっぱり高度が高いところ行くと、かちんとスイッチが入るのでしょうか。なるほど、ありがとうございます。

○越田氏　ありがとうございます。

(2)古田氏から寺岡氏への質問

○東氏　それでは、逆に、古田さんのほうから寺岡さんに、何か質問とか共感されたことなどあれば、お願いします。

○古田氏　この年表がすごくおもしろいなと思っていて、「鳥取で農業をすることを決める」とありましたが、このときは、どうしようという悩みはあまりなく、もう、すんなりやるという感じだったのでしょうか。先ほどお話されていたようにもともと不動産業、しかも大阪から急に鳥取で農業を始めるときというのはどういう心境だったのでしょうか。

○寺岡氏　そうですね。初めはやっぱり大阪で不動産業をやろうと思って退職したのです。基本的には投資が要らず、体一つあったらできる仕事だったので、それが手っ取り早いし、稼げる。結婚もすることが決まっていたので、独立してもできるだろうと思っていたのですが、そのときに妻が鳥取に帰りたいと言うので、鳥取に行くことになりました。

どこにいても仕事はできるという基本的な自信、仮に何をやっても大丈夫だという自信は自分の中に漠然とあったので、鳥取で何ができるのだろうという、そこからいろんな産業を考えました。

不動産業をやろうかなとも思ったのですが、ただでさえ、日本で一番人口が少ない鳥取県ですし、売り物件であるビルやマンションというのも大阪よりずっと少ないですよね。建て売りをつくっても若い子がいないから買ってくれないとか、そんなことを思っていました。鳥取で自分が今独立してできるのが農業というチャンネルだったのかなというところで、よし、やろうという気持ちでした。

○古田氏　すごいですね。もう一つ質問してもいいですか。大阪時代と環境もお金の感覚も全く違うと思うのですが、そういった中で、今、働く上で大切にされていることは何ですか。若いころってやっぱり稼ぎたいではないですか。大阪にいたほうが稼げると思うのですが、それ以上にやりがいなどはありますか。

○寺岡氏　そうですね。稼ぎたいというのがそもそも基本にあって、ずっとやってきました。

夫婦２人で農業を始めて、手が回らなくなってきて、人を雇うとなったときに、初めは臨時でバイトを雇いました。それが、やはり臨時ではかわいそうだから、ずっと雇ってあげようということなります。そして、従業員として若い子が入ってきてますが、この子たちが将来結婚するとなったとき、「僕、結婚するので、やめさせてください」と言われない農業をしたいなと思っています。やっぱり農業の基盤とか、収入面ですよね、農業だから低い賃金でいいということではなく、しっかり給料を上げ、待遇のよい企業にしていくというところが今のモチベーションですかね、難しいですが。

○越田氏　ありがとうございます。

6.学生へのメッセージ

(1)寺岡氏からのメッセージ

○越田氏　会場には、学生も多いと思うので、お二人から学生に向けてのメッセージを一言ずついただけたら、私たちのやる気がみなぎるのですけれども、お願いしてもよろしいでしょうか。

では、寺岡さんから。

○寺岡氏　偉そうなことは言えないですが、安定というのはないと思うのですね。約束された将来なんて多分ないと思うのです。近いところをゴールで見ていって、60、70歳の先のところで、全然違うところに行っているというのではなく、やっぱり自分で自分の道を、ちゃんと遠いところを見てそこを真っすぐ向いて歩いて行くことが大事なのではないかなと思います。

私なりにちょっと調べたのですが、多拠点居住というのはお金と時間とゆとりがあって、ロハスな生活という雰囲気を感じました。

将来は、自分の人生をどういうふうにしていきたいかというのを、漠然とでもいいので、遠くにちゃんと見据えて真っすぐ歩いていっていたら、振り返ったときに多分くねくねしているとは思うのですよ。手短なところで済まそうというのではなしに、しっかり自分が行きたい方向を見定めて、西か南か鳥取か大阪か東京かわかりませんが、迷いながら自分た

ちの人生のゴールを目指してほしい。私のイメージでは、種が飛んで土地について根を張るということができたらいいのではないかなと思います。そして、またそこから種を飛ばせばいいだけのことだと思います。

○越田氏　ありがとうございます。

(2)古田氏からのメッセージ

○越田氏　では、古田さんも、お願いします。

○古田氏　私から皆さんへのメッセージは、「今を楽しんでください」ということですね。今、情報がすごく入りやすいから、いろいろ不安になると思います。昔、私たちの時代はインターネットとかスマホもなかったので、自分のやりたいことをやっていたのですよ。でも、今はいろんな情報があって、いい部分と多分悪い部分もあると思っていて、情報だけ見て、自分がわかった気になって何か判断しがちだと思いますが、そうではなくて、気になったことはまずやってみる、どんどんアクションを起こしてほしいです。

「こうしたらどうなの」とアドバイスしたときに、「でも世の中ではこうなっていると最近フェイスブックで見ました」と言う若い子を見ると、「いや、自分の目で見ていないだろう」言いたくなります。私はどちらかといえば実践を大切にしたいと思っているので、両方のバランスというのを大切にしていったほうがいいと思います。

あとは、皆さん、自分の可能性はこんなものかなと見限らない方がいいと思います。金八先生みたいですが、本当に可能性は大きいと思うのです。大体このぐらいかなと自分で限界をつくってしまうと、損すると思います。

私自身は、専門学校のころに電通に行きたいと思ったのですよ。どうせなら、1番のところを狙ってやろうと思って電通に行こうと思ったら、そもそも専門学校というだけで受ける権利がありませんと言われたのです。四大で電通に入っている人を見るとそれがすごく悔しくて、今に見ていろと。そのときに、自分が専門学校だしこの辺でいいかなと思っていたら多分今の自分はなかったと思います。

専門学校を出た後に就職して3年ぐらいたったころに、このままでは絶対に電通出身のやつらに勝てないと思って、自分の勤めていた会社をやめて、有名デザイナーの方のところに、「ただでもいいのでどうにか働かせてください。私にはもうここしかないのです」と言いにいって弟子みたいにしてもらいました。

ここでいいやではなくて、自分が一番なりたい姿にとにかくもう突き進むしかないし、人生、あした死ぬかもしれないし、あさって死ぬかもしれないので、よそ見している暇はないと思います。今を思いっきり、パワフルに、せっかく大学という時間もある中なので、何かいろいろできたらいいのではないかなと思っています。

では、皆さん頑張ってください。

○越田氏　ありがとうございます。

7.質疑応答

○越田氏　では、最後に、参加者や学生からの質問を承りたいと思います。

参加者の皆様、何か質問のある方、挙手でお願いします。

○東氏　「暮らす」のところを見てきましたけれども、もちろん前の「働く」のところで振り返って聞きたいところなどあれば、そちらでも構いません。

○会場発言　寺岡さんに質問しますが、従業員はみな正社員ですか。それから、農閑期の仕事は何をなさっていますか。また、ブロッコリーの収穫というのは朝3時ごろからやるのだと思いますが、農業委員会による1時間の賃金である1,000円よりも低い金額でやる人がいるのでしょうか。

○寺岡氏　従業員は、会社にはしていないので社員という呼び方にはなりませんが、常勤で来てもらっています。

ブロッコリーの収穫ですが、私が入ったころは朝8時までの収穫を農協が義務づけていまして、ライトをつけて午前2時、3時ぐらいから収穫にしていたのですが、これでは疲弊してしまいます。琴浦町全体の取り組みとして、予冷庫を導入すれば前日収穫でもよいということになりました。私のところでは、そうなる前から、従業員が若い子が多くて朝早く起きられないので予冷庫の導入を進めていました。初めのころは、前日収穫ができる時期の作付をふやし、それ以前は少な目にして朝1時間の収穫だけして終わるという形にしていました。今は予冷庫を入れて、前日3時から6時の間に収穫をして、翌朝に冷たいブロッコリーを選果して農協に持っていくという形にしています。

○会場発言　それから農閑期の仕事はいかがでしょうか。

○寺岡氏　はい。農閑期の仕事ですけれども、体系的にずっと切れないように仕事をやっているので、農閑期はないです。春にスイカの準備をして7月でスイカの収穫が終わるのですが、そのころからブロ

ッコリーの定植が始まります。7 月のかかりに、スイカのハウスのすぐ後にトマトを植えておくと 8 月の終わりぐらいにトマトの収穫が始まります。ブロッコリーの時期、11 月、12 月、1、2、3 月が少し暇になるのですが、ここでネギの収穫をします。以前はホウレンソウもしていたのですが、ずっとそれをされている農家だったら利益が出るのですが、たまにする農家というのはやっぱり手が遅くって、利益が出ないというか、雇っていけないのでやめて、3 年ぐらい前から白ネギを導入して、雪がないときだけは、冬はずっとネギを抜いたり皮をむいたりしています。

○会場発言　数種類の農産物を栽培していらっしゃるのですが、これを 1 年間で学んだということになっていますが、関金の農業大学に行くとかあるいは中部の園芸試験場に行くとか、そういう学校、専門機関でも勉強されたのですか。

○寺岡氏　いいえ。鳥取県の担い手育成機構というところがあり、そこで 1 年間、最低賃金をもらいながら農業の勉強ができるという制度が私のときから始まりました。何をするのかというと、先進農家のところへ行って目いっぱい働くわけです。大阪から鳥取へ入った 1 週間で 7 キロ痩せました。それぐらい、熱心に指導していただいて、今やっている以外にも、メロン、キャベツ、大根、白菜など、家の裏でつくるような野菜を年間通して一通り教えてもらって、ある程度雰囲気がわかったので、一番よさそうなものを選んで今やっているというところです。

○会場発言　賃金についてですが、鳥取県は東京都と比較して賃金が 2 分の 1 です。しかし生活レベルからいえば、家はある、それから食べ物等は安い、魚が安いところで、ひょっとしたら余りそんなに差がないではないかという実感があります。

しかし、農家さんで来られる人は、鳥取も仕事はいっぱいありますが、年収 200 万円、300 万円ぐらいです。一方、公務員は、40 歳で鳥取の公務員で 560 万ぐらいもらっております。市役所、県で大体五百数十万円もらっている。だから、農家さんはその半分ですね。それで頑張っておられる。

中産階級というのは、統計上、年収 400 万円から 800 万円です。800 万円以上が上流階級になります。

幸福度というのは 1,000 万円以上になると収入に比例しないそうです。つまり収入がふえてもそれほど幸せではないと。だから、800 万円ぐらい目標にして生活して、あとは精神的な文化、あるいは仏教等を初めとして芸術文化等を楽しめば、非常に豊かな生活が本県ではできると思っています。だから、これを目標にして、鳥取県民はやるのがいいではないかと、私は考えています。

○越田氏　ありがとうございました。お時間が参りましたので、これで質疑応答は終えさせていただきます。

8. 総括

○越田氏　最後に総括をさせていただきます。

まずは、寺岡さん、古田さん、きょうはありがとうございました。

私たちは、地域で働く、暮らすということに関して、参加者の皆さんに少しでも価値観を変えていただきたいなという思いでやらせていただいたのですけれども、皆さんどうでしょうか。本日で、何か驚きがあったとか、そんなこと知らなかったとか、いろいろ思われたことがあると思います。それをきっかけにこれから皆さんの人生に生かしていってほしいなと思います。

私個人としては、周りのみんなが大学に行くから大学に行き、そして今でも大阪の企業にインターンに行くという完全にレールの上を走っているような状態ですけれども、恐らくここにいる学生もそういうような人生を歩んでいるような、歩みそうなものがいると思います。きょうの私は、お二人のお話を聞いて、自分の人生を考え直さないといけないなと思いました。きっと学生の皆さんも同じような思いであると思います。学生の人生の選択肢がきょうでふえたなというふうに感じております。

古田さん、寺岡さんお二人の御協力ももちろんですが、何も力のない学生を支えてくださった先生方の御協力もありましたし、そして本日の分科会を盛り上げてくださった参加者の皆さんに感謝申し上げたいと思います。

では、皆さん、寺岡さんと古田さんに、いま一度、感謝の意味を込めて拍手をお願いします。どうもありがとうございました。（拍手）

では、これで、分科会 A「一拠点と二拠点―2 人の暮らし方から地域を考える」を終えさせていただきます。本当にありがとうございました。（拍手）

分科会Ｂ

「What's ワークライフバランス？」

（司会）福田恵子

定時になりましたので、分科会を始めさせていただきます。この分科会のコーディネーターを務めます鳥取大学の福田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。この分科会は、「What's ワークライフバランス？」という分科会です。若者が結構いっぱいですね。聞いてもらって、皆さんの就職にも役立てていただけたらと思います。

私は、鳥取大学に勤めておりますが、鳥取大学で3つ目の職場になります。高校の現場にいたこともありますし、私立大学にいたこともあります。それから専業主婦をしていたこともあって、紆余曲折の人生を歩みつつ、今ここにいます。ワークライフバランスに悩んだことも多々あります。私立大学にいたときには片道60キロの通勤をしていましたので、朝4時に起きてお弁当をつくって、子供が起きる前にお弁当を玄関に置いて、行ってくるよと言って出かけるような生活を4年間続けました。帰りは居眠り運転でふっと気がついたら、ここはどこ？ということもありました。今はそれをやり過ごしたのですが、学生の皆さんはこれから働くということにチャレンジしていきますし、働いているど真ん中の方もおられると思いますので、皆さんと一緒にこの会で考えていけたらと思います。

この会の約束ですが、「気取らない」ということを講師の先生方とも話をしました。ここにいたら何でも聞くことができる、何でも話せるみたいな、そんな感じで進めていきたいなということで、私も気取らず、自分の今までの話をさせていただきました。皆さんそれぞれ思ったことをどんどん話していただけたらと思います。そうしましたら、この分科会でご報告をいただく方を紹介したいと思います。まず、鳥取県中小企業労働相談所「みなくる」の鈴木直子さんです。

○鈴木氏　よろしくお願いします。（拍手）

○福田氏　鈴木さんは管理運営マネージャーや雇用相談員などたくさんの資格を持っておられます。よろしくお願いします。もうおひと方です。鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センター、副センター長の谷口美也子さんです。

○谷口氏　よろしくお願いします。（拍手）

○福田氏　鳥取大学医学部にこのようなセンターがあることを知らない方が意外に多いのですが、すばらしい取り組みをされています。その取り組みが実現するための条件や課題、その辺を伺っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

この会の進行ですが、最初に鈴木さんが事業所や個人の方々の相談を受けておられるので、それをふまえた大きな枠組みの話をしていただき、それから谷口さんに、ちょっと先を走っている職場の環境についてお話いただきます。それぞれのご報告で質問があるかとは思うのですが、お二人の後ということでメモしておいていただけたらと思います。

それから、受付で受け取られた封筒の中に質問票があります。これは分科会が終わる頃に、自分が考えたこと、課題だと思ったこと、この後の総括セッションで話題にしてほしいなと思うようなことを書き込んでいただけたらと思います。そうしましたら、まずは、鈴木さんからよろしくお願いします。

（報告）鈴木直子氏

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました労働相談所「みなくる」で相談員をしております鈴木と申します。今日は「What's ワークライフバランス？」ということで、日ごろの労働相談の内容もお話ししながら、皆さんと一緒に考えていけたらいいなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、労働相談所「みなくる」の紹介をしたいと思います。お手元にチラシがありますでしょうか。労働相談所では、給料がもらえない、有給や休みがとれない、残業が多い、退職してほしい、これってパワハラ？とか、就業規則を見直したいなどの相談を受けております。労働相談所は鳥取県が設置しています。通常、労働相談というと、労働基準監督署や労働局をイメージされるかと思うのですが、それらは国の機関なのですね。国の機関は、何か法律違反があれば指導とか改善の調査といった権限を持っ

ているところなのですが、「みなくる」は労働相談所なので相談を聞いてアドバイスをすることが主な仕事になります。私はここに勤務して12年になります。

裏面には、労働相談を一番上に書いておりますが、労働セミナーを開催したり、労務管理のアドバイスをしたり、内職の情報提供なども行っています。あと、企業さんが働きやすい職場に向けた研修会を企画する場合、講師を無料で派遣する事業も行っています。

それから、『THE 社会人』というブルーの冊子と、『働きはじめるあなたへ』もお持ちしたのですが、この『THE 社会人』は、地域学部の学生の皆さんにもご協力いただいています。冊子をつくるに当たってご協力をいただいたり、イラストを描いてくださったりということで貢献いただいたものです。

この冊子は、労働に関するハンドブックということで、緑色のエリアは労働者のルールというかマナー的なことが書いてあります。紫の第2章のところには労働基準法を中心に書いております。ピンクのエリアは働きやすいということで、両立支援に関する社会保険の制度などを紹介しております。労働基準法というと、何か堅苦しくてわかりにくい。学校教育の中でも学ぶ機会は本当に少ない。だけど、ルールというものがどういうものなのか若い方に知っていただき、トラブルがないようにしてほしいという思いでつくったのがこの冊子です。実は、事業主の方にもすごく好評で、新しく労務担当をするようになった方、よくわからないという方にはご利用いただいております。また、人を使う、部下を持っているという管理監督者の方にも「イラストが描いてあるからわかりやすいね」ということでご利用いただいている冊子です。この小さな『働きはじめるあなたへ』という冊子はQ&A付きで、県内の高校を卒業される生徒さん全員に配布しております。

初めにPRが多くなりましたが、本題の方に入りたいと思います。実は、ワークライフバランスって何？と自分自身がまだ腑に落ちてない人間ですけれども、政府が打ち出しているものがありましたので読んでみたいと思います。「国民一人一人がやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な働き方が選択・実現できる社会を目指す」ということで言い出したでいいのかな、と思っております。

なぜワークライフバランスなのか、ちゃんと知っておこうと勉強しましたら、少子高齢化で働く労働人口が少なくなってきており、これから何十年後を見据えたときに大変な状況になることが事の発端だとわかりました。ちょっと図で説明してみると、一番上のラインが14歳以下です。オレンジのところが15歳、64歳以上の人口、下のほうが65歳とか75歳以上のラインです。現在が2017年なので、大体、65歳以上の人口が約28％と言われていて、4人に1人は高齢者という状況です。この状態がずっと続くとなると2060年、約43年後には高齢者が40％になるということです。40年後、学生の皆さんですと60歳。そのときにこんな状況になるということで、何とか労働力を確保しないと大変だということが事の発端にあったようです。

今、政府では働き方改革を必死に言っております。少子高齢化による人口減少、労働力人口の減少、そんな中で学生の皆さんもアルバイトをされている方も多いかと思います。アルバイトも定時で帰れたらいいのですが、残業をさせられることもあるかもしれません。日ごろ労働相談でも、残業でお金が払ってもらえるのだったらまだいいのですが、サービス残業が常態化していたり、長時間労働をしなきゃいけない。他にも、正社員と非正規で働くパートや契約社員、派遣、そのような方の雇用形態による問題があったりします。そんな中で、生産性の向上とかグローバル化ということで働き方改革をやっていかないと大変なことになるぞというわけです。

政府が言っているのは男性だけでなく、女性や高齢者、若者、あと、一度失敗した方、何らかの理由で仕事というところから外れてしまった方でも働けるような環境。また障害がある人、ハンディがある人や難病を抱えている人、そういう方も一人一人のニーズに合った働き方をして、何とか日本を支えてほしいというのが多分政府の狙いなのですね。誰もが活躍できる全員社会を目指していこうと言っている。それがひいては、仕事と生活をバランスよくしていかないとだめだよとか、そうすると生産性もアップしてくるでしょうとか、企業の文化や風土を変えていくという課題になってくるのかなと思います。

ある方が、これからは職業人だけではなくて、家庭でも地域でも活躍してもらえる三面性というのが求められているとおっしゃっていたのですが、それがまさにワークライフバランスなのかなと感じております。

働き方改革について少し説明をしていくと、11項目ぐらいを改革でやろうとしているようですが、今日は、星印がついたところについて労働相談を交えながらお話をしていきたいと思います。

まず、同一労働・同一賃金とか非正規の処遇改善

の問題について。私が労働相談で携わっている範囲でお話すると、現状として正社員と非正規で働く労働者の賃金格差はやはり大きいです。若いときはそんなに賃金格差があるとは言われていません。例えば、大学を終えて22、23歳等で働くのと非正規で働くのとではそんなに賃金格差がないと言われているのですが、これが40、50歳等になってくると2～3倍ぐらい賃金の格差があります。

現実問題として非正規の割合が4割近くになっている現状があります。パートで働く人、期間を区切られて契約社員で働く方が多くなってきました。また、アルバイトもしながら学生生活を送っていらっしゃる方も多いと思います。学生で何とか仕事を回している事業所も多いと思います。そうなると非正規が能力もあったり経験年数も長くなってくる。新しく入ってきた正社員の方が賃金が高く、ボーナスも支払われる。私たちには昇給もない。そういうような相談もやはりあります。最近入ってきた人が管理者、係長とかで色々と指示する。でも詳しいことはよくわからないから、全て非正規の人に任せて責任をとらない。そういう愚痴的なところで相談に来られる方もおられます。非正規は、昔は補助的な仕事をされていたのですが、今では本当に責任ある仕事を任され、キャリアも長くなっています。そういう方が正当に評価してもらって働き続けられるというのが働きやすい職場、働きがいにもつながっていくのではないかと思います。

ただ、最近、非正規の方にも昇給や賞与を渡すという企業も見えてきたように思います。非正規の方も本当に労働力として会社のために貢献してほしいということで、昇給や賞与をして引きとめる、それなりの見合った地位を与える、ということにだんだんとなりつつあるように思います。ただ、やはり賃金の格差とか、仕事に対する格差、能力評価が課題としてあると思います。同一労働同一賃金にしましょうと政府が掲げても、正社員の反発といった高い壁が実際あるだろうと思います。このあたりが私の考える課題です。

続いて、労働時間の問題。長時間労働の上限規制とか長時間労働を是正することが働き方改革の一つの項目であるのですが、現状としてやはり長時間労働は多いですね。労働相談でも多いなと感じます。少し前まではリーマンショックとかで、人減らしで突然解雇を通知されるとか、退職を勧奨されるという相談が多かったのですが、ここ数年は解雇の相談はちょっと減ってきて、退職の相談とか労働時間の相談が多くなってきました。というのも、アルバイトでも辞めさせてくれないということがあるのではないかな？　うなずいてくれていますね。次の人が決まったら辞めさせてあげるよという条件つきなのですよね。大丈夫ですよ。ルールに沿って辞められるということを、私たちはアドバイスするのですが･･･。あと、長時間労働、サービス残業が強いられる背景には、慢性的な人手不足やパワーハラスメントがあるケースも多いです。皆さんもご存じだと思いますが、若い社員の方が自殺をしてしまった電通事件もきっかけとなって、少しずつ健康経営をしていきましょうという意識はあるのかなと思いますが、やはり根本である長時間労働や人手不足を解消しないと、健康経営ですといっても実態はブラックだったということはあるかなと思います。

人手不足を解消することや生産性の向上、適正な労務管理は課題ですし、上司や従業員の方の意識改革も同時にやる必要があると思います。残業が多いとかサービス残業が多いといっても、よくよく聞いたり色々と見たりすると、日中の時間帯にだらだら仕事をしていて生産性が上がっていない「だらだら残業」だったり、「つき合い残業」もあったりします。皆が帰らないから帰りにくいというふうに、皆に合わせて残業をしているという現状もあると思いますので、そういう意識改革も必要だろうと思います。私はこの仕事だけやればいい、この仕事が終わったら即帰ります。他の部署の人が一生懸命仕事をしていても、それは横に置いといて「帰ります」と言う。そういう考え方も時には必要だろうと思うのですが、特定の人だけがずっと残って仕事をしているというのも健康経営とはいえない。やはり従業員の意識を改革して、仕事の幅を広げて、特定の人に仕事が集中する、特定の時期に仕事が集中しないように仕事を平準化していく。そういう意識も必要だろうと思っております。こういうことが課題と考えられます。

それから、女性や若者の人材育成など活躍しやすい環境を整備する、病気の治療と仕事の両立、子育て・介護等々の仕事の両立、障害者の就労ということで、政府はこういう方にも活躍してもらおうと掲げているのですが、現状を私なりに分析しても、両立支援制度はまあまあ整ってきたのではないかなと思っています。冊子には一部分しか紹介はしておりませんが、子育てとか介護をする方、治療と仕事を両立する方への制度や、有給休暇制度もあったりします。会社によっては休職制度を整えて、人が辞めないで、培った経験やノウハウをこれからも会社のためにやってほしいというふうに、取り組みやすい制度環境が充実してきたかなと思ってはおります。

育休の取得については、正社員の女性はほとんど取られるような状況になってきたと思います。非正規で働くパートさんや契約社員さんは、以前は、産前産後の休暇は取れたのですが、育休は制度的には取れなかった。でもここ最近、要件を満たしたら取れるように制度が変わってきました。また、男性も積極的に取ってくださいよということでイクボスとかイクメンとか言われていますが、正社員の女性と比べるとやはり取得率はまだまだ少ないかなと思います。

制度はあるが使わせてもらえないという現状が何だか見え隠れしているようにも感じます。本当は働きたいけれど、社長さんや周りの人から「子育てに専念したほうがいいじゃない」とか「そんなに休まれると困る」というふうに、暗に退職を促されて自分から身を引くということがよくあります。嫌みを言われたり、迷惑をかけるという意識もあるかと思います。その前に相談してくれればよかったのにと思うのですが、相談して変わることと変わらないこともあったりするのですね。そういう現状があります。

若者の正社員化も増えてきたというのがここ最近の現状だろうと思います。また、一旦離職しても再チャレンジしやすい環境になっていると思います。若い人も仕事に就いたけれど、何かちょっと違っていたということで、次にチャレンジする支援体制が整ってきたなと感じます。課題としては、制度利用への理解とかフォロー体制が充実していない。マイナスなことばっかり言って希望がないと思われるのは嫌だなと思うのですが、鳥取はやはり中小企業が多いので、余剰人員を抱えたくない企業さんが多いのですね。「フルタイムで働いてもらえないのならうちはいいわ」とか言われることもあります。制度への理解と急な休みであってもフォローできる体制を整備することが必要だろうと思います。

また長時間労働の解消は必須ですし、多様な働き方への意識改革、これは個人に対しても、企業側の使用者側も必要だろうなと思います。チームで仕事をしたら一人がちょっと抜けても周りがフォローできるとか、複数体制でフォローができる体制にしていったらいいかなと思うのですが。あと、引き継ぎとか情報共有も課題だろうなと思います。

人材育成の充実と、ストレス耐性を強化していくということも必要だろうと思います。若い方や鳥取が独特なのかもしれないですが、周りの評価を気にし過ぎる。どう見られているだろうか、こんなふうに言ったら、この制度を利用したらどう思われるかというふうにすごく気にし過ぎてしまう。それで自分一人で抱え込むように思えます。やはり思い切ってストレス耐性を強くしていく、どう思われてもいいと。一応、制度としてはあるのだから、ちょっと自己主張をしてみようというふうに思ってもらえたら、強くなれるのではないかと私自身は感じております。

あと、コミュニケーションを密にしておくこともとても大切です。一人抜けると誰かがフォローする。そのフォローが当然だとは思わないで、「ありがとう」とか「お互いさま」というようにコミュニケーションを密にしておくことがとても大切だろうと感じます。これは、仕事と生活を両立させるためにいろんな研修をするときに使うコミュニケーションの図です。上司－部下関係で描いておりますが、部下のほうが「ちょっと今いいですか？」と投げかけたときに、上司の方が「どうしたの？」と。「実はちょっと子供の具合が悪くて。明日から１週間ほど休ませてもらえないでしょうか」と言われたときに、上司の方はえっと驚くかもしれないですが、でも「子供さん大変だね。あなたも大変だけど頑張ってね」と言われると、やっぱり安心感とか信頼関係というのが双方の中で生まれてくるので、何か困ったときには上司のために頑張ろう！と愛社精神というか、上司に尽くすぞみたいな気持ちも出てくるかと思います。これが、「ちょっといいですか。子供がちょっと熱を出して休みたいのですが」「ええっ、また休むの？　何日休んだら気が済むの」とぐちぐち言われたり、「有休があるのはわかるけどさ」とか「周りが迷惑するのよね」とか言われると、やっぱり働きにくくなったり、そんなところではずっと働こうとは思わなくなってくる。これは上司－部下関係ではあるのですが、同僚間でも同じだと思います。同じ仕事の中でカバーをし合うというときに、コミュニケーションは大切で必要だと思っております。

「プラスのストローク」を多くして働きやすい職場をということです。ストロークとは心理学で相手の存在や価値を認める言動や働きをいうのですが、どんなことがプラスのストロークかというと、挨拶とか名前を呼んだり、一緒に仕事をしたり、伝えたり、話したり、聞いたり、うなずいたり、励ましたり、感謝する、褒めたり、ねぎらったり、注意をしたり叱るなどもプラスのストロークに入っています。相手が理解しているということが条件となってきます。反対に「マイナスのストローク」というと、けなしたり、仕事を取り上げるというのも労働相談の中ではあります。理不尽な行為をしたり、殴ったり、

質問に応えない、無視をしたりということもあったりする。こういうことがあるとやはり働きにくかったり、制度があっても使いにくくなったりするのかなと思います。このようにプラスのストロークを多く取り入れて働きやすい職場を目指していきましょうと訴えているところです。

最後に、「働く」を支えるためにということで、労働力人口が減少して人手不足が深刻化する中で、今、どう働き手を確保していくのかが課題だと思います。フルタイムの労働者だけではなく、短時間の労働者や在宅ワーク、こういう多様な働き方を受け入れる意識改革が必要ではないかと思っております。そうすると、仕事と生活、プライベート、働き方は変わってくるかなと思います。また、その都度都度、働き方って変わるものだと思うのです。私自身もそうです。初めは正社員でした、次は非正規でした、今はこんな仕事をやっています、というふうに、その都度都度、何を大切にしていくのかというのも人それぞれ変わっていくと思いますので、私たちの仕事は、そういう方のお話も聞いて支えていく仕事かなと思います。一人で抱え込まないで気軽に相談窓口、行政の窓口、利用されてはどうかと思います。

ちょっとおまけですが、キャリアの視点を持っておいてもいいかなと思います。ここでいうキャリアとは、個人が生涯を通して持つ一連の職業や仕事と余暇を含んだ個人の生涯にわたるライフスタイルをいっています。収入を伴うジョブ、仕事に限らず無報酬のもの、ワークも含めた家庭生活や地域生活、ボランティア活動－こう考えると、報酬を求めるだけが仕事／ジョブではなくて、色々な仕事もあるというふうに捉えると、そこからまた違う仕事も見つかってくるのかなと思っております。ちょっと時間オーバーしてしまいましたが、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

○福田氏　ありがとうございました。

質問がおありかとは思いますが、メモ書きしておいていただいて、続いて、谷口さんにお話をいただきたいと思います。

（報告）谷口美也氏

米子の附属病院のワークライフバランス支援センターの谷口といいます。よろしくお願いします。私は企業としてのワークライフバランスという視点でお話しをさせていただきたいと思います。今、皆さんはワークライフバランスをどう考えておられますか？ちょっと自分の中で考えてみてください。働きやすいというのはどういうことなのか、働き方改革とはどういうことなのか、今盛んに言われている女性活躍ってどういうことなのか。では、男性はどうしたらいいの？といういろんな視点があると思うのですけれども、そういうことを考えながら聞いていただけたらいいかなと思います。

その前に、日本の現状というのが大事になってくるので、簡単に説明できたらと思います。今、日本で働き手が少なくなってきているという現状があります。その原因としては高齢化・少子化だと言われています。そこで考えたのが、女性も働いて生産性をアップしたらもうちょっと日本はよくなるのではないかということ。でも、少子化なので女性は子供も産んでねというのが今の流れです。では、子供も産んで仕事もしろということかと言われるのですけれども、そういうことが発端となって男女共同参画とか女性活躍とか言われ始めたというのが今の社会状況です。

では働く女性は、今までどういう環境を進んできたかというと、昔、女性はクリスマスケーキだと言われていたのを知っていますか。わかりませんか？クリスマスケーキというのは24日に一番売れるのですね。女性も24歳が売れどきで、25になったらまあまあ滑り込みで売れるかな、26になったらもう価値なしというふうに昔は言われてきていたのです。ひどいよね。でも実際に、皆さんのお母さんのちょっと上ぐらいの年代までは「子供が産まれたら辞めてね」「妊娠した？　休みなんかないよ」と言われ、どうやって子供を産めというんだという時代でした。それを経て、最初は女性の基本的人権を確保しよう、その次には少子化対策で女性に頑張ってもらおうというように進んできました。

現代は、経営戦略として女性にも活躍してもらおうという形の流れになってきています。けれども、まだまだ社会の中の女性での課題はあります。M字カーブといって、大体、出産をする20代から30代前半ぐらいにかけて女性の就業率が減ります。出産をしてからパートか何かで戻っていくのですけれども、日本では、このM字カーブという状況がかなり長い間続いてきました。結婚・子育ては、仕事継続の上で大きな障害になっているのですね、現在でも。日本と韓国はそうなのですけれども、その他の国ではそんなことはないというのが現状なのです。これを何とかしなければいけない。実は最近、ちょっと日本も回復してきて、平成28年ぐらいになるとM字のへこみが緩やかになってきています。

これは、鳥取大学の就業規則ですけれども、女性が辞めなくてもいいようにいろんな制度がつくられ

てきました。妊娠したときには仕事を免除、病院なので夜勤とかあるのですが、夜勤が免除されたり超過勤務が免除されたり。産前と産後休暇が保障されて育休は男性でもとれる。とっている人は少ないのですけれども。その他にもいろんな制度が男性も女性もとれる。鳥取大学はかなり恵まれていますが、基本的にはこういう制度がいろんな会社にあるような状況になっています。

ただ、「ジェンダー・ギャップ」という数値、男女間のいろんな指標をもとに国の男女格差というのをランクづけした数字ですけれども、日本は144カ国中、今114位です。相当下です。2015年101位、2016年は111位とだんだん下がっています。2006年だったかな、80何位だったのですよね。これがだんだん下がっている、まだまだ格差がひどいというのが残念ながら今の日本の現状です。それはどうしてかというと、ライフイベントによります。ライフイベントというのは、出産とか生きていく上でのイベントです。女性は、結婚をすると正規職員さんが3分の2ぐらいに減ります。第1子を出産するとさらに減ります。第2子を出産するともっと減ります。子供3人も産んでしまうとほとんど正規職員がいなくなってくるという現状が今のところあります。先ほどのM字カーブ、ちょっとよくなってきましたと言いましたけれども、女性の非正規職員が男性の非正規職員に比べて多い。確かに働いているけれども、正社員ではないという現状があります。

おまけに、そのように一生懸命みんなで頑張ってきているのですけれども、日本のGDPは世界第3位です。それを一人当たりに直したときに下がるのです。一人当たりの生産効率はすごく悪いということがわかります。正規、非正規の割合がこの原因とは言いませんが、一つの原因になっているのではないかと思います。なので、さっき言っていた働き方改革というのが今必要になってきていると言えると思います。

これは男女間の役割意識についてです。「男性は外で働いて妻は家を守るべき」と考える人の割合が、平成25年の調査で、賛成が男性も女性も5割弱ぐらいいます。新しい調査ではちょっと減ってきていますが。こういう意識の人が日本にはまだまだいるということです。これが良い悪いではなくて、これをどう思うか、誰がどう思っていてもそれが尊重できるかということですね。例えば、旦那さんがこういう考え方を持っていても奥さんがそうではないときに、それを尊重できるかというのが恐らく大事なのだろうと思います。別に働いてないとだめというわけではないのですよ。専業主婦でもいいのですけれども、それをみんなが尊重できるかどうかが大事だろうと思います。

今まで、社会は男性社会でした。残業ができて、長時間労働ができて、仕事一筋で家庭を顧みない働き方というのが主流だった。そこに女性が同じように働こうとすると、先ほどの役割分担意識があるので、どうしても家事、育児が女性に回ってくる。女性が今までの男性のような働き方をして、家事と育児をしようと思ったら無理なのです。だから働き方改革。女性に今までのような役割が求められるのだったら仕事と家庭の両立は難しいです。でも活躍しろと言われる。だから、男性のように、という基準で考えてはいけないということが、これから求められる働き方改革だろうと思います。

では、どうしたらいいのかというと、職場でも男女で色々ワークシェアをする、家庭でもワークシェアをする。みんなが働き方改革で残業をなるべく少なくして、家に帰って、家事、育児もしましょう、男性もということなのです。ただ、今の現状がどうかというと、お母さんが子供と一緒にお風呂に入ると、お母さんが自分の体を洗う暇もなく子供の面倒を見て、裸のまま一緒に上がって自分は服を着ないで子供の服を着せてあげている。でも、お父さんがお風呂に入れればと、「おーい、できたよ」お母さんが連れていく。「おーい、上がるよ」お母さんが迎えにいく。それって違うと思いませんか。それから、だっこはしている。「うんち出たよ、おむつ替えて」。そういう見せかけばかりの人は「イタメン」と言うのですって。それから、よくお父さんが仕事に行くときにごみ捨てに行きますよね。あれはごみ捨てではないのですね。ごみ移動ですね。ごみ捨てというのは、分別もちゃんとするのがごみ捨てです。男性の方々もちょっといらっしゃいますが、どうでしょうか、というのが女性の意見です。なので、そういうことをやってくれる人を是非つかまえてください。見る目を養ってね。ただ、これから働き方改革がなされて男性も家に帰ってくるようになるのですが、もしかしたら帰ってこない男性がいるかもしれない。今、帰宅恐怖症とかフラリーマンとかが問題になってきていて、仕事が終わっても帰らない。これは、育児放棄、家事放棄だと思うので、くれぐれもこういう人をつかまえないようにしていただきたいなと思います。男性もやっぱり家庭での自分の役割は必要ですので、そういうことも考えながらこれから仕事をしてほしいなと思っています。

皆さんだったらどうしますか？　彼氏ができた

ら手料理をつくりますか？　彼女は料理上手な方がいいなって思っていませんか？　就職するときに彼氏が都会に行く、私は鳥取に残りたい、どうしますか？　それからご両親はどうでしたか？　自分の家のお父さん、お母さんを見て、お父さんは仕事ばっかりでしたか？　家事をしていましたか？　子供はそれを見て育つので同じことをするのですね。お父さんが家事をしていない家庭では息子は家事をしない。それから、お子さんに男の子と女の子がいるのにご飯のお手伝いを女の子にばっかりさせるとか。そういうことをやっていると、どんどんこの格差というのは広がっていくと思いますので、次の世代のことを考えて、男女ともに考えることが大事だなと思います。

実は、「共働きの家事育児100タスク表」というのがあります。「AERA dot.」と「役割分担」で検索すると出てくるものです。いろんな指標があるのですが、これは、男性と女性のどちらがどういう割合で行っているかを把握するために作られた表です。これを子供が1歳2カ月で10月から復帰したうちのセンターの女性の職員さんにやってもらいました。どうなったと思いますか。ピンクが本人、黄色が旦那さん。これを見た彼女は、「あっ、結構やってもらっている」とぼそっと言ったのです。こんな現状なのに！ですよ。こんなので皆さん出産したいですか？　仕事しながら家事したいですか？　ということです。よく考えてみてもらえたらなと思います。

今、日本と家庭はこんな状況です。こういう状況があるので、病院ではやっぱり女性はなかなか出産、子育てになると辞める人が多かったのです。職場からのワークライフバランスが大事だということで、その話をしたいと思います。

そう考えると、それは、家庭のことも色々できたらいいよねと思いますよね。ただ、労働というのは義務なのですね、権利ではない。日本のシステムは働かないと食べていかれないシステムになっています。仕事をする場合、働くということは労働の契約なので、労働者は労働の提供をして、それに見合ったお給料をもらうという仕組みになっています。これを踏まえた上でのワークライフバランスなのです。これを踏まえないで、ちゃんと仕事もしないで「子供がいるので早く帰ります」とか、仕事が残っているのに「子供がいるのでできません。他の人やってください」とやっていると、今、妊婦様だとか、時短が嫌いだとか、結構いろんな人がきついことを言っています。それは職場から見ると、とても困るので、注意してもらいたいなと思います。

例えば、8時間の正社員の人たちでこなせる仕事量がこのくらいあるとします。産休をとって人が欠けると、仕事はその人の分あぶれるわけですね。補充の人が入ればいいですが、なかなかこれができない職場もあります。さらに、6時間勤務の人たちが増えたりするともっと仕事が増える。どうしていかないといけないかは、これからの課題だと思います。ワークライフバランスと仕事ほどほどは、イコールではないということをよく覚えておいてほしいと思います。

職場で行うワークライフバランス推進は福利厚生ではなくて、行政の行う支援とも違う。働く職員の子育てを支援するのではなくて、子育てしている職員が思う存分働けるための支援というのが職場で行うワークライフバランス支援です。子育て支援だけではなく、今は介護を理由とした離職者が増えています。男性も年間2万人ぐらいが介護で仕事を離れています。今までの日本は8時間バリバリ働いてプラス残業もできる、そういう人たちだけしか生き残れなかったけれども、これからは恐らくいろんな人が出てくる。障害者も入ってきます。がんの治療をしながら働く人も出てくるかもれない。お父さんの介護をしながら働く人も出てくるかもしれない。こういういろんな人たちが働くだろうから、この人たちでどうやって仕事をしていくかを考えていかないといけないですし、職場以外にも役割というのはたくさんあるので、地域での自分の立ち位置、家庭での立ち位置、職場での役割、そういうものを大事に考えていかないといけないかなと思います。

ようやく附属病院の話になりますけれども、附属病院は365日24時間稼働してないといけない職場です。夜間勤務とかも当然必要になります。いろんな職種の人たちがいますが、ほぼ全ての職種に女性がいます。それぞれの職種の専門性が高く、命を預かる非常に責任の大きな業務内容です。患者さんが急変すれば残らないといけないし、新しい入院患者さんが入れば対応しないといけないという超過勤務がざらにある職場です。夜勤や当直もあるような不規則な職場ですし、そもそも疲れていてミスをすると大変なことになるという職場です。なので、一旦職を離れるというか、辞める人が多かった歴史がありました。一旦辞めてしまうと、どんどん医療は進歩しますので戻ってこられないという状況もあったので、慢性的にいろんな職種で不足があります。今でも医師は不足しています。その他のいろんな職種でも不足があります。おまけに、今、女性医師は増えてきて、日本の医師の3割以上が女性なのですが、出

産や育児で辞めてしまうと困ったことになるのですね。どう辞めないようにしていくか。診療科の中で特に大変だったのが産婦人科、小児科です。最初は7割近くの女性医師が、30代後半になると3割ぐらいに減ってしまう。続けられなくて辞めてしまう。こういうような状況があったので、こういう人たちを何とかしたいということでワークライフバランス支援センターができました。

当初、ワークライフバランス支援センターをつくりたいと言ったのは、もと看護部長さんです。女性医師一人一人に面談をして話を聞いてみたら、すごく不満があったそうです。トイレが汚ない、更衣室もない、男性と同じような働き方を求められる、子供が産まれたら辞めないといけないという状況があった。この方が「センターをつくりたい」と言ったときに「いいよ」と言ったのが今の学長の豐島先生です。なぜかすんなり通ったそうです。なぜか。豐島先生がおられた職場にすごく頑張る女性医師がいて、やっぱり女性は大事だと思われたというのがすんなりいった一つの要因だったと聞いています。

附属病院はワークライフバランス支援センターをつくったことを初めとして、推進のための色々な取り組み、もともと不足している医療者が辞めないようにする取り組みをたくさんやっています。もともとが厳しい職場なので長時間労働というのはまだ手がつけられていないのですけれども、その中でもいろんなことをすることによって、辞めないように頑張ってもらっています。子育て支援だけではなくて、メンタルヘルスのサポートですとかキャリア支援、働きやすさ支援なんかもやっています。これは昔からの取り組みの経緯です。子育て・介護支援ではなくて両立のための支援ですし、センターを情報提供や情報交換の場としています。

その中でも大きいのが院内保育所です。院内保育所は毎日、お正月、お盆もお休みなしで運営しています。病児保育もしていますし、学童保育も始めました。ただ、これは全員が入れるわけではなくて、ここの院内保育所でないと働けない人が最優先になっています。早朝とか夜勤の勤務にちゃんと働いてくれる、でも、その時間帯だと民間の保育所では預かってくれないので、ここでないと無理ですという人たちが優先です。ひとり親家庭も優先ですし、日曜や土日に働く人も優先になっています。子育て両立支援は、小学校に上がっても必要です。学童保育は、保育所より早く時間が終わるので（親が勤務中で）お迎えが間に合わない。短時間勤務制度などの支援は就学前までなので、そういうことが課題になってきます。また、学校行事への参加や宿題の答え合わせ、夏休みの自由研究など親が手伝わないとできないようなこともあります。塾の送り迎え、部活の送り迎え、土日に部活のお弁当をつくったり、そういうことが幾らでもあるので、本当に子育てをしながら仕事を続けていくことは大変です。

他には、育休中の人を集めた交流会もやっておりますし、メンタルヘルスの支援は外部の相談員による相談窓口ですとか、センターの職員が必ず勤務時間内は誰かがいて相談対応に当たっています。本当にいろんな相談があって、家庭のご主人の不満とか、ちょっとシビアなところはパワハラやマタハラがあります。それから、不妊治療をしたいけれどもどうしたらいいかとか、そういう相談もあります。その他、研修会や面談もしています。

働きやすさ支援は夕食持ち帰りサービスです。毎日お弁当というわけにはいかないのですが、本当に大変なときにはこういうのを利用してもらえるとちょっと楽になると思います。先ほどの院内保育所では晩ご飯を食べさせてもらえるので、私もよく利用しました。子供が晩ご飯を食べて帰ってくると本当に楽なので、あとはお風呂にだけ入れて寝かせれば、お母さんは後でカップラーメンでも食べればいいとなると、気持ち的に楽ですね。

キャリア支援や無料で受けられる語学教室もあります。家に帰らなくても職場で受けられる語学教室。これはキャリアアップのための支援です。医師が辞める人が多かったので、辞めなくてもいい、柔軟な勤務体系で働けるようなシステムもつくりました。

その他、アメニティの整備です。トイレが汚かったらトイレを直す。当直室は薄暗く汚かったのをきれいに直しましたし、シャワールームや搾乳室もあります。マタニティ白衣も貸し出し。これは貸し出しだけではなくて、「どうですか、育休明けの働き方は決まりましたか？」という、顔を見たコミュニケーションがとれるというのが非常にいいことでした。

他には、いろんな講演会をしたり、ホームページとか、お手元に配っていますワークライフ手帳、便利帳みたいなものですけれども、こういうものも発行しています。

あとは、ひとり親家庭の支援です。二代前の病院長が『シングルマザーを応援します』というポスターを東京駅の地下に張ったのです。その当時の病院長の思い切った決断だったのですけれども、これを張ったことによって「言っちゃったから仕方ないよね。するしかないよ」みたいな感じで職場がついてきたという経緯があります。これはすごく大事だっ

たと思います。上がしっかり方針を持っていて突き進むと周りはついてくる、そういう状況です。実際に附属病院の女性医師は辞めなくなりました。あと、出産する人が増えました。今、90人ぐらい女性医師がいるのですが、毎年、10人超出産します。そもそも医師は少ないので、結構大変です。

あと、看護師の離職率も低いです。全国平均は10%なのが6%ぐらいです。ワークライフバランス支援センターに対しての相談件数も最近どんどん増えてきています。年間、大体300件を超えています。今年も現時点で200件を超えていますので、いろんな意識が高まってきているかなと思います。ただこれは、ある医療機関の一例なのです。これが全てどこの職場でも役に立つかというと、それは職場の勤務環境とか職員さんの業務内容にもよると思います。職員、年齢、男女比によっても違うと思いますし、時代の流れによっても違うと思いますので、参考程度です。

ただ、私が感じてきたのは、最初は皆さんのワークライフバランスに対しての意識啓発を一生懸命やって、制度を一生懸命つくった。その後、何しようかというと、制度を増やすのではなく、個人個人の意識だなと思います。結局、自分自身がワークライフバランスというものを自分のものとして考えて取り組まないと、幾ら制度をつくってもうまくいかない。与えられたものでは無理だということを、本当に最近感じています。最後は、自分がその制度をどう利用してどう働いていきたいか。自分の家庭生活をどうしたいか。自分の人生をどうしたいかだと思います。

職場だけではワークライフバランスは成り立たないので、地域を巻き込んだ取り組みが必要かと思います。最近は、皆さんが自身のものとして取り組むという意識啓発を支援できるような取り組みに変えています。語学教室は、教室を準備して「皆さん来てね」というタイプではなくて、グループを組んでもらって「こういう勉強をしたい」という人たちにお金を落とすという形の支援にしています。自分自身のメンタル強化のための研修会など、これは結構人気でしたが、こういうものに取り組んでみたりもしています。

ということで、参考になったかどうかわかりませんけれども、皆さんの最初の考えはどう変わったか、ちょっと考えてもらったらうれしいです。以上です。ありがとうございました。（拍手）

○福田氏　ありがとうございました。

熱のこもったご報告で、残りがあと10分になってしまいました。さあ、ここで質問を受け付けましょうか。何か聞いてみたいということがありましたら、ぜひご遠慮なく。では、寶來先生どうぞ。

○会場発言　鳥大の寶來と申します。この度は貴重なご講演をありがとうございます。自分もやっぱり悩んでいるところだったので、先生方のお話を聞けて本当に救われた気持ちになりました。谷口先生にちょっとお聞きしたいのですが、看護師さんやお医者さんは超過勤務が一般的になっている中で、そこをうまくフォローする保育所というか、施設があるということですが、自分とリンクして考えた場合、超過勤務する体制は整っているけれども、親と子が接する時間が少ないことによる子供への影響というのをやっぱり考えてしまって、仕事を切り上げて帰ってしまうのですが、そのあたりのこと、現場では何か、お話しとか、問題とか、いろんな相談とかあったりするのでしょうか。

○谷口氏　特に看護師さんとか医師とかは、実際にそういう相談はほとんどないです。この病院に就職するに当たって、夜勤をするのは当然だと思って来られている方、やっぱりそういう職だというのを理解して来られている方が多いです。最近、医師の方で仕事をちょっとセーブしたいという方はいらっしゃって、ご自身からパートになりたいという方はいらっしゃいます。でも、職場としてはそれを否定するのではなくて、やはりそれも一つの働き方であって、そういう働き方をする人を尊重するというのが大事だと思います。皆に超勤をして働けというのではなくて、それぞれの意思を尊重するというのがこれから必要になってくるんだろうなと思います。

○会場発言　どうもありがとうございました。

○福田氏　他にはいかがでしょうか。女性を中心にした話が多かったですけれども、男性の立場から。ケイツ先生、日本に住まれて長いですが、色々と問題意識を持っておられるのではないかと思うのですが、いかがでしょう。

○会場発言　地域文化学科のケイツです。私は、国際理解、異文化理解とかの授業を担当していますが、他の暮らしぶりとか、違う世界が見えるかどうかが課題だと思っています。自分の国、自分の町、自分のコミュニティーしか見えていないと、他の可能性は見えてきません。

毎年、私は、メキシコプログラム等を担当して学生をメキシコへ連れていき、3カ月ほど滞在します。やはり文化の違いがあります。メキシコの文化では家族はとても大切にされます。毎日の夕食は家族一緒。それが基本です。そして仕事が終わるのは大体、

午後の3時。3時になると「はい、もう帰ります」と。自分の世界ではあり得ないことがメキシコでは平気でやっているので、学生達はびっくりします。卒論生の一人はスウェーデンと日本の女性の事情を研究しています。やっぱりスウェーデンと日本の暮らしぶりの現状は、びっくりするほどたくさんの違いがありました。私は、こういう専門をやっていますけれども、やはり外国との比較、外の世界の男女、暮らしぶり、ワークライフバランスの幾つかのパターンを見てもらって、外国の手本とかイグザンプルを見てみて、ちょっと考えさせるようなきっかけがあればと思います。それについて、コメントか感想をお願いしたいと思います。

○福田氏　鈴木さん、いかがでしょう。

○鈴木氏　どう答えていいか。すみません。

○福田氏　谷口さんはいかがでしょうか。

○谷口氏　アメリカとかは、恐らく考え方自体が違うと思うのですね。育休とかという概念はないですし、ナニーと言われるお手伝いさんをどんどん利用して、その人たちに子育てをワークシェアして一生懸命働いている女性の方は多いです。でも、そのかわり職場では高いものを求められるので、やはりプロ意識を持って仕事をする。そのために家庭では分業でする。でも、それは男性も女性もですね。男性も仕事が終わったらすぐ帰って家事をしますよね。でも、女性レベルを求めていない。子供のために宅配ピザを頼んでもいい。全般的にそういう価値観が恐らくアメリカなんかではあると思います。日本は医療費に一番お金をかけていますが、フランスはすごく子育て支援が充実しています。参考になるものは色々あるとは思います。ただ、そこに至るまでの制度だけを見ないで、そこの背景にある考え方だとか、そういうものも一緒に学べるといいのかなと思います。

○会場発言　ありがとうございました。

○福田氏　何かご質問はありますか。先ほど鈴木さんが、どう答えていいかとおっしゃったのは、鈴木さんが受けられている相談というのが、ワークライフバランスを考える以前の、本当に働くことがぎりぎりになっているような状態のものであったり、そのような企業に対して研修をされるというお仕事内容です。ワークライフバランスというのは、多分その上の段階にあるので、ちょっと急に思いつかなかったということだろうと思うのですが、いかがでしょう。

○鈴木氏　ありがとうございます、フォローしてくださって。確かにそう言われるとそうだなと思います。日本には、働きづめということが現状としてやっぱりあるように思います。ライフを楽しんでいる人ってどれだけいらっしゃるんだろうと現実に思いますので、そんな中で心が疲弊してメンタルダウンするという相談も、やっぱり労働相談所なので多いですね。本当にそれは変えていかなきゃいけないなと思うのですけれども、自分にできることは、やっぱりしっかり聞くということだろうと思います。その人が何を大事にしているのかを聞いたり、置かれている状況を聞きながら、少しでも変えていく何かがないか一緒に考えていくというスタイルのところなので。本当に。考えていかないと皆さんが倒れてしまうので、そこを何とかしたいと思っております。

○福田氏　恐らく谷口さんが勤められているところは、組織の中で相談をしたりするのが何かうまく循環しているのではないでしょうか。どんどん相談件数が近年増えてきているのですよね。鈴木さんの方に行かれる方は、多分、組織の中で相談できる方がおられないというか、そういう仕組みが整っていない。あるいは、他の人に聞いたときに、回り回って尾ひれがついてしまって非常に働きづらくなるという、日本の独特の文化があるかもしれませんけれども、そういうものがあって相談ができない、するところがない。だから、鈴木さんのようなところに相談しに行くということもあるのではないかなと思うのですね。

時間が来てしまったのですが、一つ谷口さんに伺いたいのですが、どうやったら組織内で相談がしやすくなるでしょう。気にかけておられることとか努力をされているようなことがありますか。

○谷口氏　「待ってない」ということが大きいのかなと思います。例えば、新規採用の方に面談をしたりするのですね。「困ったことがあったら相談に来てくださいね」ではなくて、新規採用の人には全員、「何日の何時に来てください」という形で必ず来てもらうようにしています。あとは、職場を異動した方にも３カ月後ぐらいに。「相談があったらどうぞ」ではなくて「来てください」と言ったら大体みんな来られるのですね。そこで、この間もあった事例ですが、「もう実は限界なんです」と言われて、ああ、やっぱりこの「待ってない」というのは大事だなと思いましたし、一度相談すると顔が見える関係ができているので、次につながりやすいですね。マタニティ白衣なんかもただ貸すだけではなくて、なるべく雑談をして「復帰後は決まっていますか？」とか、「話がちゃんとできていますか？」というのを必ず聞くようにすると、「実は困っているんです」とか「保

育所ってどこがありますか」とか、そういう話が出てくるので、やっぱりこちらからの歩み寄りが大事なのかなと思っています。

○福田氏　ありがとうございます。ここから白熱するのですけれども、もう時間が3時になってしまいました。残念ですね。そうしましたら、この後、総括セッションでまとめ上げていきたいと思います。もし、聞いてみたかったこととか、総括セッションで議題にしてほしいなと思うことがありましたら、質問票に書いていただいて、この会議室を出られる前にスタッフに渡していただけたらと思います。

先生方、ありがとうございました。(拍手)皆さん、悩まないでぜひ相談に行ってください。そうしましたら、3時15分から1階の第1会議室で総括セッションがありますので、そちらのほうに移動をお願いいたします。

Ⅴ．総括セッション

柳原邦光（鳥取大学地域学部副学部長）

はじめに総括セッションの説明をする．最初に 2 つの分科会から報告を頂き、その後、討議として 35 分間、最後に私が 10 分間でまとめを行うこととする。

次に、分科会の報告を頂く方々の紹介をする。本日は分科会が 2 つあり、「一拠点と二拠点居住」については、地域学部の学生である兼城賢翔さんと和田真理子さん、そして教員の竹内先生にお願いする。もう一つの「ワークライフバランス」の分科会については、コーディネーターの福田先生にお願いする。それから川井田先生と岡村先生には進行役のお手伝いをして頂く。それでは一拠点居住と二拠点居住から報告をお願いしたい。

兼城賢翔（地域政策学科 3 年）

僕たちは、一拠点居住と二拠点居住をされているゲストに来て頂いた。一拠点居住では、琴浦町で農業をされている寺岡氏、二拠点居住では、八頭町で隼 Lab.というプロジェクトをされている古田氏に来て頂き、学生目線の質問やゲスト同士で質問の交換を行った。その後に、集まっている学生や地域の方々たちと一緒に意見を交換する流れで行った。その詳細を報告する。

和田真理子（地域文化学科 3 年）

今回分科会でゲストをお招きし、話を伺ったが、大阪から鳥取へ来られ農業をされている寺岡氏は、もともと鳥取の出身ではないが大阪から農業をするために来られ、新しい地域に入る時に人とは違うことをしているところを見せていくためにコミュニティーと連携をとって農業を進める方法を紹介された。やはりインターネット上の情報だけではなく、現地にて生で体感できることを大切にされ、またさらに鳥取でされていないような新しいチャレンジ等を交えて農業を展開されている。

次に、鳥取の八頭町と東京で二拠点居住してお仕事をされている古田氏に話を伺った。二拠点で仕事をするには交通費や移動の問題などがあるが、古田氏は東京でデザインのお仕事をされ、八頭では地域に密着した仕事を展開されている。古田氏は八頭町出身である。地元の仲間と地域の施設を活用したり、飲食店やゲストハウスなど人が集まる場所をつくったりして活動されている。二拠点であることのデメリット以上に 2 つのことをやるなかで得るものがあり、金銭的なデメリットについてはその分稼いでいけば良く、働くだけでなく暮らすことに関しても二拠点で、家があるということだった。

○兼城氏

わたしたちにはそもそも狙いがあった。それは鳥取で働く、あるいは暮らすという選択肢をゲストのお二方の話を通じて提案していければということである。それを「働く」という目線と「暮らす」という 2 つの目線で参加者に伝えたいと思い企画した。

実際には大学生をメインターゲットにして分科会を実施したいと思っていた。方法としてはパネルディスカッションとして学生 2 人が司会を進め、お二方に私たちが質問を投げかけそれに答えて頂く形で進めた。寺岡氏には働くことに関する質問として、他の農家との違いは何か？ビジネスにおける人とのつながり方や情報収集の重要性は？などを尋ねた。

古田氏には東京と八頭町で二拠点居住をされているためそのメリットやデメリットについて、またどのように多くの人を巻き込んでいくのか、収入は生

活できる程なのかなどを率直に尋ねた。

次に暮らしについて尋ねた。古田氏は大体半分程度を八頭町で、残り半分を東京で暮らしており、それをスライドにして週末の多くを帰っていることなど説明された。その理由は最近結婚されたばかりということで、ほほ笑ましいエピソードも含めながら紹介された。その後お二方の暮らし方や働き方について寺岡氏と古田氏でお互いに質問し合い、意見を交換し合うという流れで進めた。

○和田氏　最後にお二方から参加していた学生に向けてメッセージをいただいた。寺岡氏からは、自分の人生、将来の道を目先の手近なところだけ見るのではなく、遠くまできちんと見通して、漠然としていても良いので、遠くの目標やゴールなのかは分からないが大きな目標をつくり、そこへ向かって真っすぐ歩いていくことが大切だというお話を頂いた。

古田氏からは、自分の可能性はこの程度かなと自分で見限ることなく、やりたいことや一番自分がなりたい姿をもち、それに向かって突き進むことが大切だといとうお話を頂いた。

○兼城氏　その話のなかで印象的なやりとりがあった。古田氏に八頭町の山奥での取り組みは稼げているのかと率直に聞いたところ、まあまあとのお話しだった。そこでもう少し深く掘り下げたいと思い、30 代の平均年収は 410 万円程度だが、それより高いかと尋ねると「まあ高いかな」と返事があった。その次に職業を言わずに大体 630 万円程度の年収よりは上かと尋ねたら、それより上だという。630 万円は多くの大学生が目指すと言われている公務員の平均年収である。公務員でなくとも山奥での仕事であっても、困難なことはあると思うが、実際に 630 万円以上稼いでいるという。つまり地方でも稼げるのだ。この話は、私たちが抱く地方や田舎は稼げないという一つの固定観念をひっくり返した。固定観念を覆すということが本分科会のテーマだったため、この点はうまく伝えられたのではないかと印象的だった。

○和田氏　私が印象的だったのは、寺岡氏が大阪から鳥取に来られた理由が、奥様が鳥取の方で婚約されるときに鳥取に戻りたいとなられて一緒に戻られたということだった。古田氏もご結婚されていて、奥様とお子様は東京におられる。それで古田氏が鳥取と東京を行き来して、週末にはなるべく東京にいるようにしているということである。それぞれ家庭をもたれている中で、寺岡氏は奥様と一緒に鳥取で暮らすという人生を選ばれ、古田氏は御自身のやりたいお仕事を二拠点でされる中で、なるべく御家族と一緒に時間を過ごされるような方法を選んでおられる。働くということだけでなく、家庭を持つことや御家族と一緒に人生を歩むことも考えておられる。それがとても印象的だった。

○福田氏　第二分科会は、ワークライフバランスというテーマで、お二方に御登壇頂き話を進めた。お二方をお願いする際、ワークライフバランスを考えるとき、一つは大きな仕組をまず考える必要があると考えた。そこで鳥取県の中小企業労働相談所「みなくる」の鈴木直子氏にお話を伺うことにした。大きな枠組みが分かっても、こんな職場で実際に働きたいと思えるような事例があったほうが具体的に考えられるのではないかと思い、鳥取大学医学部の附属病院でワークライフバランス支援センターがあり、そこでの活躍をぜひ紹介したいと思い、谷口美也子氏にご登壇頂いた。

まずは鈴木氏に話を頂いたが、なぜ今、ワークライフバランスなのかと問われたときに、鈴木氏自身は、今まで考えたことが実はなかったとおっしゃった。その理由は、鈴木氏が今担当されているお仕事は、ワークライフバランスを考える以前の、非常に深刻な労働問題を抱えておられる事業所で、いかに健康的な職場にしていくかをサポートされるお仕事であり、また個々の労働相談を受けられるような立場のため、そのバランスをとるというところまで思いが及ばないという実態があった。日々のお仕事が、まだ健康でない人たちに対していかにサポートできるか、アドバイスができるかということに邁進されているため、ワークライフバランスについて考えさせて頂いたとの話から始まった。

現在 65 歳以上の方は 28％だそうだが、学生の皆さんがちょうど高齢者の域に入る頃（40 年後）には、4 割が 65 歳以上になる。これでは労働力人口が非常に減っていくため、働き方を変えなければ今のままではとても立ち行かないということから話を始めて頂いた。

その中で鈴木氏は、働き方改革を考える時には収入が得られる仕事だけではなく、収入にならないような家庭の中での家事・育児なども実は働くということであり、地域の中で活躍することも働くということという視点で話を進めて下さった。

また現在は特に女性のほうが高いのだが、4 割程度が非正規雇用の働き方になっていることを問題視していかなければならない。若いときに非正規雇用で働いていたとしてもそれほど正規雇用の人たちと格差はないが、40・50 代になった時、所得格差が 2～3 倍になる。では自分はどのように働くかを、考

えていかなければならない時代になっている。

また病気の治療と仕事、子育てと仕事、介護と仕事というふうに、2 つの仕事を両立させるような制度もできつつあるということで、充実してきたとのお話もあった。しかし制度はあるが、使わせてもらえない現実が実際にはある。制度はあっても、制度を動かすその私たち個々の立場、管理職や同僚の意識によってストップがかかってしまっている現実があるとの話もあった。

自分たちの職場は長い時間生きている場である。その生きているその職場の中で、自分たちが生きやすいものにしていくためには、制度を利用するということ、みんなが理解するということと、お互いにフォローし合うようなそんな体制がどうしても必要になってくるだろう。そのためには 2 つ秘訣があり、フォローをするときにコミュニケーションを密にとっていれば頼みやすく言いやすいということがあるので、コミュニケーションをとっておくということも非常に大事だということだった。そしてこんなことを言ったら何か言われるか、こんなこと言うべきではないと、日本人は自分の気持ちを話す前に自分の中でストッパーをかけて表現しない、そういう文化が今まであったと思うが、そうではなくて、もっとストレスに強くなりましょうというお話も伺って、どう思われても主張してみようという、そういうことも大事だということだった。

また受ける側も言葉一つでも返答の仕方で随分職場の雰囲気が変わる。例えば「今日休みたいけれども」と言われたら「そう、大変だよね。今日は休んでいいからね、また今度一緒に頑張ろうね」と言ってもらえるとすっきり休めて、次の回からはこの間休んだからもっと頑張らねば、と会社の中がうまく回り始め、安心感や信頼感から愛社精神が培われる。こうした職場に貢献したいという気持ちが芽生えてくることが、全体に広がるととても働きやすい、ずっといたい職場になっていくのだという話であった。

鳥取大学附属病院ワークライフバランス支援センターの話だが、最初この御報告を聞く前に、こんなセンターがあったらいいなと非常に安易に考えていた自分がいたと思い反省した。なぜ附属病院にこういうセンターができたかというと、365 日 24 時間で経営されている病院で、命を預かる仕事に携わり、そこで疲労が出ると危機や危険に直結する。それを防ぐためにもワークライフバランスがどうしても必要だという、非常に差し迫った現実があるという話をお伺いし、自分の認識がまず甘かったと思った。しかもワークライフバランスは、要は職場でのワークライフバランスを意図しているため、例えば、子育てをしている職員がよりよく働ける、そのためのサポートであるとのお話であった。職場で行うワークライフバランスの捉え方が良く分かった。

当センターが立ち上がった経緯は、看護部長らの話からだったそうである。組織全体をよく把握をされ問題意識も明確にあり、しかも経営にもかかわられるような方だからこそ、まずその問題が提起された。問題が提起されてそれを形にするときに、当時の医療部長であった（今の）豐島学長が院長をされていた時にゴーサインが出た。たまたまそこに居合わせた管理を担っておられる方々が問題意識をもち、形にするということを意思決定されて行動に出たというところから当センターが生まれた。そこから私たち一人一人が大変だということを声に上げないといけないし、それを拾って形にするということがうまく回ったからこそ、このようなセンターができ上がったと分かった。

当センターはたくさんの取り組みをされている。院内保育園、子どもが小学校に上がってからもサポートがあり、また育児休業中の方々の交流会、メンタルヘルスの支援、夕食の持ち帰りサービス、キャリアアップのための語学研修など非常に幅広い活動をされている。

最後に大切だと思った点は、ワークライフバランスを考えるときに、鈴木氏もおっしゃったことだが、相談に来られて「解決して下さい」という他力本願的なものでは解決にならないということであった。要は自分が自身の問題として引き受けて、意識を変えて行動を変えていくということが重要であった。

次にそれをサポートする制度が整うことで非常にうまく回り始める。ただ表現ができる人もいればできない人もいる。その意識啓発も大切であり、また表現できない人たちのために待つのではなく、サポートする側から面接などで話を聞くようにする。一旦関係性ができるとどんどん話がしやすくなる。それがうまく回り、たくさんの人に共通する困り事であれば、組織として、制度として整えていかなければならないため、個人の困り事が表現されて制度になり、また制度を使いながら出てきた課題でまた次の活動が生まれるということを伺った。

○柳原氏　それぞれの分科会で、質問を通して論点のようなものがもし出てきているようなら紹介頂きたい。

○金城氏　子どもの学資、特に大学に子どもを進学させるための不安がこれから就職しようとする学生にはあるが、寺岡氏や古田氏のように鳥取で働く中

で、不安に対してどう対処しているかという話があった。それに対し寺岡氏は、そうした不安は鳥取で暮らさなくとも大手の会社に勤めてもいつ倒産するか分からない時代にリストラにあうかも知れないため、そういうことは考えなくちゃいけないのだと話された。

それから最後に頂いたメッセージとも繋がるが、どういう人生を自分たちで歩んでいくか覚悟みたいなものが何より大事であるということだ。これが今後に対する働き方のあり方のような一つ論点・焦点かと思った。みんな公務員になり安定した先を目指すというレールに乗った就職活動をこれからしようとしていた学生からすると、そういうことも考えなければならない。働き方の多様性を学んだ。

○福田氏　未解決で少し出てきたのが、鳥取大学の医学部附属病院では夜勤や長く働かれるということが大前提になっているため、親子で過ごす時間が少なくなっていることに関してはどうなのかという問いがあった。それからケイツ先生からも、やはり家族は基本的に大事にしたいためワークライフバランスを考えるときに、日本だけではなく海外との比較もしながら日本のあり方を検討していくべきではないかという御指摘も頂いた。自分で自分の生き方を決める、覚悟を決める。例えば家族との時間が欲しいと思って仕事をセーブしたければ、それを尊重するということが組織として非常に大事なことではないかというお話が出た。

○柳原氏　今回の分科会のテーマ設定は、大会の冒頭で紹介があったように、地域学部の地域学総説という必修科目の授業で今回の大会と同じテーマ「地域で生きる場をつくる」を掲げたことと関係がある。授業を進める中で、学生たちから出てくる問いに私たちが答える、あるいは実践されている方々にお話を頂き、その問いへの答えを探していこうというのが今回の分科会の趣旨である。

基調講演も基本的には同じような考え方から企画した。学生たちは「自分たちの今後の生き方をどうしたらいいのだろうか」や、あるいはより直接的には「これからの働き方をどういうふうに考えていったらいいのだろうか」という不安を持っていたのではないだろうか。それは生き方を模索しているということである。そのため学生たちに考えて欲しいテーマを幾つも出してもらい、その中で多くの学生が望んでいるテーマを 2 つの分科会のテーマとして設定した。

2 つ目の分科会のワークライフバランスの大きな背景には、少子高齢化と労働人口の急激な減少という現実がある。労働人口が急激に減り高齢者の数が増えていくため社会をどう支えるか､維持するかは、非常に大きな問題になる。そこで出てきたのがワークライフバランスという一つの考え方である。政府もその考え方で進めていきたいと思っているようだ。要するに、労働人口が足りなかったら実質的な労働人口を増やせば良い訳であり、企業であまり働いてこなかったような人たちに働いてもらったらどうかとなり、女性がそこに進出していくという言い方をされているのだろうと思う。それから政府がこれまで発表してきたことを考えてみると、高齢者も年金暮らしだと思わずに元気なうちは働きましょうという話だと思う。そのため働く人の数を増やして経済活動を活発化し、あるいは維持し、消費も維持するなり上昇させるなりして GDP も含め経済成長を達成していこうという考え方が背景にあると思われる。

また学生たちが今回の 2 つのテーマをやりたいと考えたのは、おそらく最近ブラック企業といわれるようになったこともあるだろう。うまく就職できたとしても就職した先がブラック企業で、自分のアパートに帰るのが夜中になってしまったのでは体がもたない、そんな不安があり A 分科会でご登壇頂いたお二方のような生き方は自分たちにもできるのではないかという期待があったのだろうと思う。

もう一つ、ワークライフバランスといわれる言葉で、バランスをとろうという意味のためこちらももう少し勉強してみたいということだった。

つまり、実際にワークライフバランスが語られるということは、そうなっていないから語られる訳であり、現実が非常に厳しいということである。その厳しい現実の中で学生たちはこれから長い人生を生きていくためどういう生き方が自分たちにできるだろうか、働き方ができるのだろうか、そう問うたのが今回のこのテーマ設定になっているのだろう。

一拠点 VS 二拠点居住では、お二方とも最初から今のような生き方を選択されてきた訳ではなく、どうも人生の中での思いがけない展開であったようである。思いがけない展開だが、しかしお二方とも積極的にとてもポジティブに現実にかかわっていこうとされている。そこに学生たちはできるだけ安全なところに就職したいという気持ちだけではない何かを感じ取ったという印象を受けた。

ここで 2 つの分科会を連動させたいが、ワークライフバランスについて言うと、やはり鈴木氏がおっしゃったように現実が非常に厳しいということである。そのためワークライフバランスというところまでもっていけるような状態が良いのだが、なかなか

そうはいかないため、いきなりバランスというよりは、国が進めている、これからこう目指しましょうというある種の制度的な仕組みができていく中で、それを労働の現場にどう生かしていくのか、使いこなしていくのかということをおっしゃっていたのではないかと思う。

附属病院はもちろん地域の拠点で、命を預かっている非常に重要な現場であるため、そこでしっかりワークができるようにするということが、病院が地域の人たちに貢献する第一の課題・使命であるということである。それでできる限りの工夫があり、そうすると、分科会Aと分科会Bでは、若い人だけではないが、今回のテーマ設定からみて若い人たちがこれからどのように生きていけるのか、どういう生き方を選択できるのかという点で通底する問題提起があったといえるだろう。

Ⅵ．閉会挨拶

山根俊喜（鳥取大学地域学部副学部長）

では、終わりの挨拶をさせていただきます。地域で生きる場をつくるということで、午前の森さん、午後の分科会では寺岡さん、古田さん、鈴木さん、谷口さん、貴重なご提案をいただきました。地域課題と、それにかかわったいろんな実践を出していただきまして、非常に興味深かったと思います。中身について言及したいところですが、怒られますので言いません。ここで30分ぐらいしゃべれるかなと思うぐらい、相当考えさせられることがありました。

最後、私たち、その看板にありますけれども、地域学研究会というのをつくっていて、研究例会なんかも開いています。今日は、いろんな実践や、その中での課題を出していただきましたので、そこに「知のクロス」とありますけれども、そのいろんな実践や課題を「知」の方がどうやってまとめるのか、さっきの議論にありましたけれども、生活とは何か、その中に労働をどう位置づけるのかとか、いろんな立場があると思いますけれども、そういうことを含めて深めていきたいと思います。来年もまたやります、やる予定ですので、来年までもう少し「知」の方も深めていって、新しい知的な提起が理論的にもできるようにしていきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

地域学研究会第８回大会　地域課題と知のクロス

―地域で生きる場をつくる―

【主催】鳥取大学地域学部
【後援】鳥取県・新日本海新聞社・鳥取大学尚徳同窓会

【スケジュール】10：00～11：45（第１会議室）
【開会挨拶】　藤井　正（鳥取大学地域学部地域学研究会会長）
【理事挨拶】　法橋　誠（鳥取大学地域連携担当理事）
【来賓挨拶】　高橋　紀子氏（鳥取県地域振興部部長）
【趣旨説明】　福田　恵子（鳥取大学地域学部地域学研究会副会長）

【基調講演】

森　まゆみ氏　「地域雑誌『谷根千（やねせん）』とその後」

【昼休憩】　12：15～13：30

ポスター展示（次項参照）　コアタイム 11：45～13：00（第２会議室） 学生有志からなる「トットリ式屋台」による販売（第１会議室の前）

【分科会】13：30～15：00
【分科会 A】「一拠点居住 VS 二拠点居住」（第２会議室）
〔登壇者〕
1.　寺岡　昌一氏（てらおか農園代表）
2.　古田　琢也氏（(株) トリクミ代表取締役）
〔学生運営メンバー〕
兼城賢翔・川口憂稀（鳥取大学地域学部地域政策学科 3 年）
越田佳苗・小嶋太一（鳥取大学地域学部地域環境学科 3 年）
東寛章・和田真理子（鳥取大学地域学部地域文化学科 3 年）
窪前志帆　　（鳥取大学地域学部地域教育学科 3 年）

【分科会 B】「What's ワークライフバランス？」（第４会議室）
〔登壇者〕
1.　鈴木　直子氏（鳥取県中小企業労働相談所みなくる管理運営サブマネージャー労働・雇用相談員）
2.　谷口　美也子氏（鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センター副センター長）

【総括セッション】15：15～16：30（第１会議室）
〔総括セッションコーディネーター〕
柳原　邦光（鳥取大学地域学部副学部長）
・分科会 A・B 報告　・ディスカッション
【閉会挨拶】　山根　俊喜（鳥取大学地域学部副学部長）

地域学研究会第8回大会ポスターセッション

2017年11月25日（土）とりぎん文化会館2階第2会議室
掲示時間：9:30～16:30　コアタイム：12:15～13:30

地域学部活動紹介	
1	＜わいわい淀屋＞における地域と連携した学生活動―倉吉市明倫地区における地域協働教育― 藤井正（地域学部）
2	東アジアで活躍できる人材育成 垣屋知里・藤縄望・小村幸基（地域文化学科）・柳静我（国際地域文化コース）
3	インターローカル的な視点から見る地域と海外－地域学部の海外フィールド演習を例に－ 中朋美（国際地域文化コース）
4	地域学部生卒業生の進路（平成19年度～平成28年度の卒業生）
地域学部附属子どもの発達・学習研究センターの研究活動	
5	あいサポート条例の策定過程と今後の課題 小林勝年（子どもの発達・学習研究センター）
6	発達・学習の基盤を支える身体性および姿勢・運動発達の促進 儀間裕貴（子どもの発達・学習研究センター）
7	鳥取市における子どもの貧困の実態と課題－鳥取市子どもの貧困対策調査分析を通じて－ 大谷直史・畑千鶴乃（子どもの発達・学習研究センター）
地域連携研究員の活動	
8	JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域 「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」プロジェクト 原口悠（地域連携研究員）・家中茂（地域創造コース）
9	H28年度「T式ひらがな支援」結果報告 赤尾依子（地域連携研究員）・小林勝年（子どもの発達・学習研究センター）
10	ハムカ大学との交流の再始動に向けて―インドネシアと日本のインターローカル― 伊藤紀恵（地域連携研究員）・筒井一伸（地域創造コース） 大元鈴子（地域創造コース）
11	ドイツのオペラ劇場における劇場教育（Theaterpädagogik）－ドイツ語の歌曲およびオペラアリアの演奏法研究－ 小倉知子（地域連携研究員）・西岡千秋（国際地域文化コース）
鳥取県環境学術研究等振興事業	
12	野生の鹿角・鹿茸を活用した健康食品・機能性食品の研究開発 田村純一（鳥取大学地域学部）・保坂善真（鳥取大学農学部） 清水克彦（鳥取大学産学・地域連携推進機構）・澤田廉路（鳥取大学学長室）
教員・大学院生の研究活動	
13	歴史資料を活かした鳥取市街地の魅力発見プロジェクト－まちのたんけんを中心に－ 谷口美紗（地域政策学科）・岸本覚（国際地域文化コース）
14	自然の力による鳥取砂丘海岸の環境回復 小玉芳敬（地域環境学科）・宮脇隼輔（大学院・地域学研究科） 岩淵博之（大学院・地域学研究科）
15	商業立地のマルチエージェント・シミュレーション－Game-Based Situation Prototypingによる文理融合の実践－ 白石秀壽（地域創造コース）・三浦政司（鳥取大学工学研究科）
16	高大連携による地域系高校の実践型教育を通した人材育成の展開 武田信吾（人間形成コース）、筒井一伸（地域創造コース）、関耕二（人間形成コース）、 アレクサンダー・ギンナン（国際地域文化コース）、白石秀壽（地域創造コース）、 小泉元宏（立教大学社会学部）
17	地域フィールド演習・海士町訪問研修－地域創造のキーパーソンを目指した実践力構築の取り組み－ 竹川俊夫（地域創造コース）

地域学研究会第８回大会
地域課題と知のクロス

ー地域で生きる場をつくるー

学部長挨拶

鳥取大学地域学部長
藤井　正

鳥取大学地域学部は、生活の質の向上とその基盤である地域の持続可能な発展をめざして、今年度から新たにスタートしました。これまでの４学科から「地域学科」１学科３コースの構成とし、さらに学際的に融合して地域の課題にアプローチするとともに、現場往還型の学びを充実させて実践力のある人材を育成します。本大会のあり方も一新させ、「学生とともにつくる地域学」をめざして企画・運営に学生も参画し、若きエネルギーを注いでくれています。

第8回大会のテーマ《地域で生きる場をつくる》では、私たち一人ひとりの足元から暮らしをみつめ、より豊かに地域で生きることを支える条件や方法について考えていきたいと思います。基調講演（午前）では、生活者の視点から多数の著書を執筆されている森まゆみ氏にご講演いただきます。午後からは、学生たちの問題意識をもとに、地域の新たな未来を切り拓く糸口を探っていく分科会を企画しています。地域を担う等身大の若者の思いや願い、柔軟な発想から、地域づくりのヒントを得て頂けますと幸いです。

スケジュール

9:30　受付開始（第１会議室前）

10:00　開会挨拶・大会趣旨説明

10:30　**基調講演**　**「地域雑誌『谷根千』とその後」**　**森　まゆみ 氏**

作家・編集者。現在、東京大学客員教授、早稲田大学ジャーナリズム研究所招聘研究員、明治学院大学国際平和研究所研究員。1954年東京都文京区生まれ。早稲田大学政経学部卒業。東京大学新聞研究所修了。1984年、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（『谷根千』）を創刊、2009年の終刊まで編集人を務める。専門は地域史、近代女性史、まちづくり、アーカイブ。1998年に『鬼外の坂』（新潮社、1997年）で芸術選奨文部大臣新人賞、2003年に『「即興詩人」のイタリア』（講談社、2003年）でＪＴＢ紀行文学大賞、2014年に『青鞜の冒険』（平凡社、2013年）で紫式部文学賞を受賞。その他、サントリー地域文化賞、建築学会賞（文化賞）等受賞。上記以外に、『「谷根千」の冒険』（ちくま文庫、2002年）、『女三人のシベリア鉄道』（集英社、2009年）、『海に沿うて歩く』（朝日新聞出版、2010年）、『おたがいさま』（ポプラ社、2011年）、『暗い時代の人々』（亜紀書房、2017年）、『子規の音』（新潮社、2017年）等、多数の著作がある。

12:15　**昼食，ポスターセッション**　**会場：第２会議室**

飲食コーナー
「トットリ式屋台」の開設！

昼食時間と休憩時間に、第１会議室前のスペース等を利用し、学生と地域住民の連携による「トットリ式屋台」が飲食の提供を行います。

13:30　**分科会**　**会場：第２・第４会議室**

「一拠点居住 VS 二拠点居住」
「What's ワークライフバランス？」

15:00　休憩

15:15　**総括セッション**

16:30　閉会挨拶

16:35　終了

会場へのアクセス

2017年 **11/25(土)**

10:00～16:35（9:30受付開始）

申込不要・参加無料

問合せ：鳥取大学地域学部庶務係　tel. 0857-31-5073

※参加の際に支援の必要な方は事前にご連絡ください